

# 地域と農業

会報

第 11 号  
Oct. 1993

*Autumn*

特集

農業・農村の変革を目指す女性像

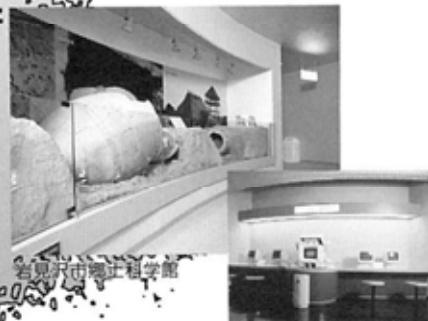
社団法人 北海道地域農業研究所



霧多布温泉センター



函館市北方民族資料館



岩見沢市蝦夷稚文学館

北の大地で芽をだし20年、  
今では大地にしつかり根をはり  
大きく広がった幹をもつ企業へと育ちました。  
北海道で生まれ、北海道で育った私たち、  
これからも北海道の歴史人と未来を見つめつづける  
企業でありたいと考えます。

## 歴史と人と未来を結んで

### おもな業務内容

博物館・資料館など展示施設の設計・施工  
パンフレット・カタログなど印刷物の企画・制作  
映像やコンピュータ装置による観光案内施設  
看板・標示板などのサイン計画

**gb** 株式会社 現代ビューロー<sup>↑</sup>  
GENDAI BUREAU CO.,LTD.

〒060 札幌市中央区北2条西3丁目 札幌第1ビル7F  
TEL 011-231-6049 FAX 011-222-6149

# 地域と農業



表紙写真  
撮影者=谷口雅之

## 一目 次一

### 特 集 農業・農村の変革を目指す女性像

3	いま、農村婦人は何をなすべきか	作家 向井 承子
10	農村女性の果たす役割	北見農業試験場北見専技室 主任専門技術員 片山寿美子
16	農村に新しい風を	旭川市生活改善グループ連絡協議会 会長 西島八重子
22	酪農に託した夢	猿払村 円丁 康子
26	農村と都市の生活情報チャネルを開きましょう	コープさっぽろ生活文化研究所 所長 田端 弘子
32	「若妻の翼」ヨーロッパへ飛ぶ	福島県相馬郡飯館村 高橋美佐子
37	BOOK REVIEW	酪農学園大学農業経済学科 教授 三田 保正
38	ときの話題	
38	冷たい夏に問われる「新農政」	北海道大学教育学部 助教授 鈴木 敏正
40	解 説	
40	青年団活動が育てる地域づくりの担い手	北海道大学大学院 大坂 祐二
46	連 載	
46	情報システムはいま 10	北海道地域農業研究所 専任研究員 中村 正士
52	エッセイ	
52	北極圏の農業?	現代ピューロー取締役会長・北海道フィンランド協会専務理事 井口 光雄
55	研究日誌・DATAFILE	

# 農業・農村の 変革を目指す女性像



いま、農業は国際化時代を迎え、新しい農業・農村の方向が模索されている。

反面、農村では高齢化が進む一方、若者が次第に減少するという現象となっている。そのためにも農業・農村の活性化が急務の課題となっている。

この農業・農村を変革するため、婦人が果すべき役割は極めて重要な意味をもつてている。

本号では各界・各層から婦人の主張を特集した。

(編集部)

## いま、農村婦人は何をなすべきか

作家 向井承子

一九六一年、北海道大学法学部卒業。  
北海道庁勤務後、「フリー」に。現在、作家。  
著書に「大地の女たち」「小児病棟の子どもたち」他。  
共著に「変貌する農村と婦人」「むらを動かす女性たち」他。

## 農業は天地・自然と人の和で

### 農村は心安らぐ宇宙

農村女性の生きる姿に心ひかれ  
て、現場をお訪ねする機会が少な  
くない。

いつたい、どんな点に心ひかれ  
るのか、と問われても、その道の  
学者や研究者ではない私には理論

的にうまく整理整頓して伝える術  
はない。だが、印象めいた表現を  
いくつかならば、記すことはでき  
るような気がする。

もつとも心ひかれる理由のひと  
つは、そこが長い時間私たちの精  
神が依つてきた魂のようなものを  
未だに備えた、心安らぐ宇宙と感  
じさせてくれる点にある。

その反対に、都会とは、商品と  
して生き残ることのみが許される  
モノたちの溜まり場である。街を  
歩けば、それぞれの生存を賭けて  
大量に市場に送り出され、売れ残  
れば廃棄されるしかない宿命の商  
品が、決死の厚化粧で消費者を襲つ  
てくる。なにもかもが、貨幣を生

む経済のシステムから切り離して  
は存在しない宿命で、道路はひつ  
きりなしに掘り返され、景色は時々  
刻々に変化する慌ただしさである。  
なじみの店や人が、一夜にしてか  
き消える。春夏秋冬、一刻の休み  
もなく新しいトレンド商品が開  
発陳列され、古いものはいすこへ  
ともなく押しやられる。もわづん、  
ともなく押しやられる。もわづん、

農村も軽薄な使い捨て文化の流れ  
を支えるマーケットとして期待さ  
れ、十分にその役割を果してきた  
ことも分かっている。だが、旅人  
の心に触れるものは、なぜか、ど  
こか違う。その違いをここに記し  
てみたいと思う。

いうまでもないが、農業とは天  
地自然の理に従順でなければなら  
ない産業である。嵐のような高度  
経済成長期を経て、工業化社会に  
すっかり変貌してしまったこの国  
では、自然が存分に人間を支配す  
る光景など、時として都市機能を  
麻痺させるほどの大水害や台風以  
外にはほとんど体験することがな  
い。

くなってしまった。が、農業は四季のめぐりや気象の少しの変化に  
も大きな影響を受ける。近代文明  
国家の擁する産業でありながら、  
天候不順や干ばつ、冷害などに打  
つ手なしといった宿命は、まだそ  
の営みの大部分が天地自然の規律  
に支配されている。自然とのつき  
あいをもつとも大事にする産業と  
言つてもよいだろう。

### 農業は孤独では

#### 成り立たない

しかも、古来、農業は孤独な作  
業では成り立たない性格である。  
家族や共同体を営みあう人間たち  
が、天地自然の理を軸に、人間の  
ささやかな力を寄せ合つ。そういう  
う宿命が養ってきた香りが、いま  
もふんふんと漂つて感じられるの  
である。機械に代替しえない、シ  
ステム化できない要素が多すぎる。  
工業化社会の流儀には、そもそも  
なじまないその宿命こそが、都市  
に住む人間の心をとりえるのだろ  
う。

たとえば、緑に包まれた農村の  
色。それは、なんと旅人の心を癒  
してくれる」とだろうか。労働に  
従事しないもののノスタルジック  
な感傷と言わればそれまでだが、  
その次元の話題ではなく、緑が長  
い生き物としての人間の歴史を通  
して、人の心を癒す色となつてい  
ることを考えれば、国土に緑を保  
つ作業をなりわいとしてくれる人  
たちに、私たちは感謝しなければ  
ならないと知らされる。緑が失わ  
れていく危機に対して、緑化を制  
度化して今までまもろうとする時代  
である。だが、農業とは、制度の  
下で「公害に強い樹木」などを植  
栽する都市計画とは違い、産業の  
性格そのものが人の眼になじみ心  
を癒す性格を持つのである。その  
意味を、農業に従事する人たち自  
身は、意外に気づいていないので  
はないだろうか。

美しいものは美しい、心なじむ  
ものはそれだけでいい、と素朴に  
感じたいのだが、技術文明、  
社会経済、制度が、それぞれ独  
に複雑に発達してしまったこの国  
の現在である。こんな現実には、  
田んぼを美しいと言うにしても、  
いささかの理屈をかりかけもどき

にかけた方が、その美しさの保全には効果があるかもしない。さらには、その美しさの下で働く女性たちの立場に思いをやる時、もう

## 補助労働から家庭内における脱却と

### 家庭内における男女平等

さて、そんなに農業に思い入れがあるのならば、あなたは農家に嫁ぎ嫁になれば良かつてではないか、と言われそうである。確かに、そんなことは考えたこともない私が、なにしろ、結婚なども夢に憧れを持った年齢、つまり私が大学を出たばかりの三十年前には、私が農家に抱いていたイメージと言えば、キツイ、汚い、危険……今まで三ヶ月に加えて、貧しさがあった。だが、若い女性にとっては、以上のこととは決して決定的な問題ではないのである。愛する人と労苦をともにするのは、それはそれで幸せなのであって、農家のイメージでもつとも忌避したかったのは、戦前をいまだにひきずつているかのような家族関係の古さではなかつたろうか。嫁はただ黙々と働いていればよい、しかも自由

ひとつ、農業が現代のありように極めて挑発的な産業である」とを知られるのである。

になる小づかいさうろくにもうえない。戦後民主主義から十年以上も経ち、世の中には労働基準法なるものも存在し、女子の深夜労働はいましめられ、生理休暇や産休の制度を具体的に職場で実現すべく労働組合がたたかおうとしている時代、農家は近代化とは無縁の、まるで古代の化石のような世界に感じられたものだった。

だが、私には違和感があった。いまならば声高に呼ばれて当然の、「男女の役割農業の見直し」がまったく射程に入つていなかつたためである。女性はあくまでも「補助」、そして「家事は女の天職」という設定に私は抵抗を感じてしまつた。民主憲法はすでに基本的人権としての男女平等をうたつて、職業選択の自由も基本的人権に掲げられていた。都市で職業を貫こうと心に決めた「新しい女」にどうしては、「補助労働からの脱却」は

大学を卒業した後、ほんの数年間だが北海道厅に勤め広報誌の編集を仕事とした時期があつた。一九六一年の卒業で、ちょうど農業基本法制定当時にあたつて、ある時、農業政策を広報する必要があつて、農業基本法の趣旨を私なりに咀嚼しようと試みた。なのに

つけ、近代化、大規模化が声高に呼ばれた法律の一端だが、「婦人の農業労働を近代的家族農業經營における補助労働としての適正な地位に安定させ、家事労働を無理なく担当できるように」という理念が置かれていたのを印象的に覚えている。「無理のない家事労働」「近代的家族農業経営における補助労働力としての婦人の適正な地位」とは、その時代の農家の意識と比べれば、まさに改革を掲げた宣言だったと思う。

だが、私には違和感があった。いまならば声高に呼ばれて当然の、「男女の役割農業の見直し」がまったく射程に入つていなかつたためである。女性はあくまでも「補助」、そして「家事は女の天職」という設定に私は抵抗を感じてしまつた。民主憲法はすでに基本的人権としての男女平等をうたつて、職業選択の自由も基本的人権に掲げられていた。都市で職業を貫こうと心に決めた「新しい女」にどうしては、「補助労働からの脱却」は

しかし、現実の厳しさを教えられたのもそのうだつた。一九六一年から数年間、広報編集のために、全道各地を訪ねたのだが、いまも脳裏に焼きついて離れない光景は、筆舌に尽くしがたいほどの開拓地の貧しさである。しかし、自らが耕した農地への愛着は離れがたいほどある。自らが切り開いた大地からもぎとられるように、涙を飲んで「離農」を決意する人たちの虚ろな表情は、道厅の新米の公務員として現地を訪ねた若い心をうちのめすのに十分な現実だった。

農業における男女平等をうたうどころではなく、私の仕事は施策としての「離農奨励」を筆にするところであった。「拳家離村」の津波が、やがて開拓地や農村を襲つことは容易に想像できた。  
いま、北海道の農村の美しい光景を眼にする都度、開拓しそくさ

### 農業基本法では

#### 婦人は補助労働力

大学を卒業した後、ほんの数年間だが北海道厅に勤め広報誌の編集を仕事とした時期があつた。一九六一年の卒業で、ちょうど農業基本法制定当時にあたつて、ある時、農業政策を広報する必要があつて、農業基本法の趣旨を私なりに咀嚼しようと試みた。なのに

れた大地の底に沈められた怨念の

ような光景が思い浮かぶ。国策の

結果、農村よりも先に豊かになっ

た都會の様子が、テレビを通して

農村に流れ込んだ時期だった。豊

かさを求めて、国民は雪崩をうつ

て消費者になった。女性たちはた

だ家族に尽くしていたのでは手に

できなかつた労働報酬を、農業以

外の世界で働くことによって初め

て手にし、紙幣とじや紙切れによつ

て買う「自立」の味を知つていく

ことになる。都會と農村の生活の

格差を、農民たちが初めてまざま

ざと知らされた。それだけの力を

テレビは持つていた。都會は誘惑

に満ち、一方、農村は捨てられる

べき要素に満ちていた。農民たち

が悲惨な農地を捨てて町に出たの

は当然だったのだろう。

## 農村をリードする

### 女性の出現

三十年を経て、私は現代に生きながら仕事をする女である。そのままさして農業の地を訪ねながら、こんどは、いま女性が働く意味を囲う絶好の場として農業があるの

では、と思い至つてゐる。

一昨年、道東の別海町農協婦人部の集まりを訪ねる機会があつた。

威圧的なほど「近代化」された農

業環境に眼を見張りながら、もつ

と眼を見張りされたのは、胸を張つ

て農業を語る女たちの出現

だった。台所と田んぼに這いつぐばるよ

うに一生を過ごしたかつての農婦のイメージとは遠く、

国際情勢から農業技術まで、農業經營、農

業技術まで、堂々と語る女たち。私が出

会えたのは、農村地域のリ



別海町農協婦人部の集会

な存在ではあるけれども、確かに目に触れるようになつてきている。日本の農業は女性が支えている。とはいっても、主張する。事実そうであつても、主張しないことを美德としてきた世代とは大違いである。そのこと

が、農村女性の生き方を周う集まりでは

当然の前提で

産業を担つて

いる以上、家

庭内の地位は

確立されなければ

ならない

し、子育てや

高齢者の介護

などは社会保

障として当然

の権利として

主張する。このようないーダーのシ

ンボジウムなどに参加する時、壇

上よりも、会場発言の勢いのよさ

は、隔世の感である。

女性たちは、もはや、農村は父

祖伝來の美德にとみ、心豊かで子

育てにもつとも適している。母性の豊かに花開く地……などの美しさにまやかされはしない。美德めいた自慢話や、傷をなめあうしかない愚痴や悪口が事態を解決するはずもない」とをすでに承知している。

## 農業者の保障と老後保障

女性たちは、家族農業が中心のこの国の農業を男性とともに担う農業の協同経営者として、いかにすればその立場が確立されるのが、いつもその仕事に従事しているための条件とはなにか。

して、いつかはやってくる働き続けた後の老いの時間の保障のありようまで、生活実態の上でも、制度上でも確立できるための摸索を具体的に始めているように見える。

家族とともに農業を行なう女性たちの立場に立つた具体的な提言や実

情報誌を耳にしていると、私が若

い時代に感覚的に願つていたこと

……たとえば基本的人権の下

で自由な意思を持つて選択の結果

の結婚をし、職業を持ち継続し、

子を産み育てながら、家族が共に互いを支え合い、いのちの続く限りその職業が続けられるのにふさわしいような魅力を持つて継続できるように願い、そして老い病み弱った時には、納税者の権利によって社会保障を受け、地域共同体の中で共同の思想による支え合いの中で生きていけるように……。ところでユートピアに似た理念を掲げられる要素「みちた場」としての農業が存在しているのに改めて驚かされる。かつて、その旧さに驚き、その場に近づくのさえためらうよう「感じられた農業の内側で、嘗々と女性たちの歩を固めてきた農婦たちの根強さに畏敬の念さえ抱く始末である。

自分たちが選んだ職業としての農業の未来をどのように保障していくのか、という社会経済的な話題と、農業を生きた結果のそれとの老後をどのように保障できるか、というふたつの課題は決して別々のものではない。

アットランダムにテーマをあげるだけでも、女性の家庭内の地位の確立、日本農業の国際的な位置づけの確立、国内外における産業

術の習得、経営技術の習得、そして、高齢化社会に向けての社会保障のありようを問う試みなどなどが、どれも切り離しがたく結びつき、農業を生きる女性に複眼的な視野をせる。

私が各地で眼を見張らされる女性とは、「こんな複眼的な思考を身につけながら、まずは足元からの具体的な実践報告を行う人たちである。まだ兆しのよくな少數の人たちではあっても、こんな女性たちに各地で出会う時、専業主婦もキャリアウーマンも含めて、流通過程の末端として生きるしかなくなつた都市の女性たちが身につける機会を奪われてしまつた」思考の総合性、全体性の回復の兆しを、農村にこそ思はせられるのである。

しかし、その兆しをほんものにするには、女性たちをとりまく現実は、なまはんかなかかわりはどうにもならないほど、複雑なものになつているのも事実である。確かに、女性たちはかつての奴隸労働にも似た存在から脱却はしたが、それを支える大きな要素に、

としての安定、そのための農業技術の習得、経営技術の習得、そして、高齢化社会に向けての社会保障のありようを問う試みなどなどが、どれも切り離しがたく結びつき、農業を生きる女性に複眼的な視野をせる。

たとえば、大規模農家になればなるほど男女ともに労働時間が長い、というデータがある。いや、大規模農家の農繁期の午前十時に老人の自殺率がもっとも高まるというデータもある。人は、豊かさを求めて働くわけだが、形の「ゆとり」、たとえば農業経営の規模を拡大すればするほど借金もふくらみ、労働も増え、労働時間も男女にかかわりなく、規模の大きい農家の方が多い、というデータなどを眼にすると、改めて、人はなんのために働くのか、という問いを投げかけなければなるまい。

そして、どんな経営規模であっても、女性には、家事、育児、老人介護の負担は平等に訪れる。それが女性の役割と固定されていることは、意識改革の任を負う先駆者たちは、理想の旗を掲げて前線を切り開く異様なエネルギーを必要とするのは必然なのだが、これだけでは長続きはしない。先頭に立つものは疲れ果て燃え尽きるように倒れ、その他大勢はエーリッヒ・フロムのいう「自由からの逃走」

近代技術があるとすると、今度は、そのことが必ずしも女性の労働軽減や家族との団欒の時間の増加に結びつきはしない、というジレンマに気づかされることになる。近代化に翻弄されたとも言える、近代の不消化状態が、いま農村を覆つてはいないだろうか。

とはなんだったのか、という疑問に結びつく。

いま、農家の主婦たちは、これまでにない複雑な葛藤におかれているように見える。建前としての「近代化」や「意識改革」という課題が農協婦人部や行政指導という形で降りてくる。農村の女性指導者たちは、「ことばを踊らせるよう」にその大きさを説く。しかし、現実に家族それぞれの意識を変えたとえば、大規模農家になればなるほど男女ともに労働時間が長い、というデータがある。いや、大規模農家の農繁期の午前十時に老人の自殺率がもっとも高まるというデータもある。人は、豊かさを求めて働くわけだが、形の「ゆとり」、たとえば農業経営の規模を拡大すればするほど借金もふくらみ、労働も増え、労働時間も男女にかかわりなく、規模の大きい農家の方が多い、というデータなどを眼にすると、改めて、人はなんのために働くのか、という問いを投げかけなければならない。

そして、どんな経営規模であっても、女性には、家事、育児、老人介護の負担は平等に訪れる。それが女性の役割と固定されていることは、意識改革の任を負う先駆者たちは、理想の旗を掲げて前線を切り開く異様なエネルギーを必要とするのは必然なのだが、これだけでは長続きはしない。先頭に立つものは疲れ果て燃え尽きるように倒れ、その他大勢はエーリッヒ・フロムのいう「自由からの逃走」

さながらに無責任な日和見に逃れ

てしまうだろう。

## 高齢化社会の到来と

### 女性農業経営者の位置づけ

では、どうしたらいいのか。

「事実は小説よりも奇なり」ということばがある。二十世紀末、なんとさまざまな変化が私たちをとりまいていることだろう。実態

は理論よりも先行し、意識は時代の実態にひきずられるより」しゃにむにの変化を迫られる。現在とはそんな時代である。しかし、現実に反射するだけでは、女性の歴史が進むべき正しい方向を見失ってしまう。私たちはよくよく事態を見据えながら、この激動の時代を前向きに受け止めて行く必要がある。

その意味で、高齢化社会の進行は、女性史に大きな変革をせまるテーマの筆頭にあげられはしないだろうか。  
いまでもないが、日本の高齢化のスピードは世界一である。まもなく、四人にひとりが高齢者といつも未曾有の事態がやってくる。どう対処したらいいのか、いまや

国家的な政策アーマではあるのだが。一足先に高齢化社会を迎えた西欧諸国と比べてみると、ことに女性のまなざしに照らせば、あまりにも姑息なのである。

基本的に、「高齢者のみどりは家族の手により在宅で行われるべき」という意識がこの国には根深くしみついている。それは長い歴史を通してしみついた「意識」であって、現実は「意識」だけで解決できない段階にすでに至っているのに、「現実」に対応できる「具体的」な方法を編み出す作業を、官民ともにサポートージしてきた。その結果、発生したのが、「生活者」である高齢者を「患者」として病院に収容する「社会的入院」と呼ばれる現象である。当然、医療費は急増する。そして、医療費抑制という財政的な見地から、今度は高齢者を医療からしめ出そうという政策が登場していく。

### 高齢者の介護負担が女性に

いま、保健医療福祉の流れは「施設」から「在宅」へ、と大きく変化した。もちろん、どのような政策も登場する時には美しい表

現で彩られる。クオリティ・オブ・ライフの保障などが、その「コンセプト」となってはいるが、しかし、「在宅」への流れを受け止めるのは結局女性なのである。受けてのまなざしで冷静に考えると、農業者に限らず、女性の社会進出が必要な時代の「在宅」には、その政策を現場で具体的に支えるシステムが同時に用意されない限り、根

づくはずがない。しかし、「」ことが弱者の幸福といのちの安全にかかる」とだけに、待ったなしの対応をせまられる家族は結局、なんの援助システムもないままにひとしより抱え込む。そして、歴史上かつてないほどの、深刻な介護負担が女性にかかるという事態につながるのである。

異常事態とはいつけれども、この国は現実には、福祉や医療にほ

とんど力を入れていない。それは、数字で簡単に証明できる」とで、先進国と比べた時、医療費の対GDP比も、明らかに最低レベルにある。最低レベルの医療が、さらに乏しい福祉を支え吸収した結果が「社会的入院」である。これまでの高齢者政策が財政面から破綻して、単純に「在宅」へ向けての流れがつくられている実情こそ、納税者であり、地域の構成者である私たち、また福祉の担い手としてしまう女性たちが、未来に向けて、総合的な思考の枠組みをつくるための絶好の機会と私は思うのである。

まず、介護する側に立つて考えてみよ。老後のみどりの担い手に、主婦を中心とした女性たちの家内労働が見込まれても、現実に農業労働に従事している女性たちは、家事や仕事に加えての長期にわたる老人介護をこなせるはずがないのである。その悲劇がさほど表面化しないところにむしろ日本女性の問題があり、「家」の内側で、鬱積した感情がからみあう陰

渥な悲劇は、まさに修羅場、生き地獄を生むばかりである。

事態は意識の変化に先行する。

とえて言い切ったのは、「このよ

うな長いみどりは、これまでの儒

教道德の支配していた時代」には想

像もつかない新事実だからである。

かつては、老人は寝ついたら死ぬ

のが常識だった。あすはわが身な

のだから、おとしよりにやさしく、

という感覚がそれなりにまつとう

できた程度の老人介護と、現在の

それとはそもそも質が異なる。

「寝たきり老人」など存在しな

かつた長い歴史が生まれ出した日本

人の心性を教育的にもぎとるのは

容易なことではないのだが、事態

は異様な悲劇に突入している、と

いう面から眺めれば、その現実を

直視するところから、私たちに巣

くってきたモラルを一掃すること

もできそうである。

確かに、文化とは、穏やかに伝

承されながら成熟していくのが理

想だが、こと高齢化社会への方法

論に関しては、古来の落ちついた

知恵の伝承を絶つところからしか

問題解決の鍵は生まれないと思う

に至っている。

「この」とは決して、老いて社会に役立たなくなつたものを置き去りにして経済を繁栄させたり、浅薄な若者文化に迎合することで、かつてない事態だからこそ、そしてこの現象が、要するに近代医学や近代技術を使使した結果、公衆衛生の徹底や栄養学の徹底、工業化社会の成熟による経済成長を基盤に登場した「近代的」マとしては特定の弱者が対象ではなく、だれもが遭遇する大衆的なテーマであればこそ、近代的に改革しなければ、問題解決はできないと思うのである。

## ヨーロッパの対応

最近、ヨーロッパの農業国がどうやって急速に進行した高齢化に對処してきたのか。資料にあつては、「ドイツの老人」（坂井洲二著、法政大学出版局）という興味深い書物に出会った。同書には、ドイツの農業地域特有の存命中には住宅・食糧・食事、病気になった場合の世話および看護、せんたくを行うことなど……などの細目が、実に細かく約束」ととして書かれているのである。

日本では、嫁だけがなげうとか、息子が仕事をやめて扶養をすればいいなどの話題が斬新なものとして登場する現在である。それはそれで、嫁だけにまかされてきた習慣を崩すきっかけに、過渡的に「親の扶養の限度」についてのとりきめだった。「病氣もしくは看護を擁する状態が二週間以上経過し、そのため看護が困難になつたことを考慮するとき……」ということを考慮するとき……」といふ書き出しで、相続人や家族にかかる負担が大きすぎるようになつた場合には、「看護の義務は停止される」とある。それが「週間」とは日本人の感覚では信じられないほど短い。扶養が家族の能力を超えた時、その後の保障は社会の役割となる。ホームや病院の費用は、保険、年金の体系と大きくかわる。そのような社会保障のシステムを作ってきた国と、現在の日本とは簡単に比較はできないものの、「近代」という時代を通過する間に、社会保障のシステムをも同時につくりあげてきた歴史を、いま改めて学ばなければならないと思ふ。

実は、もっとも驚かされたのは、「親の扶養の限度」についてのところを考慮するとき……」といふ書き出しで、相続人や家族にかかる負担が大きすぎるようになつた場合には、「看護の義務は停止される」とある。それが「週間」とは日本人の感覚では信じられないほど短い。扶養が家族の能力を超えた時、その後の保障は社会の役割となる。ホームや病院の費用は、保険、年金の体系と大きくかわる。そのような社会保障のシステムを作ってきた国と、現在の日本とは簡単に比較はできないものの、「近代」という時代を通過する間に、社会保障のシステムをも同時につくりあげてきた歴史を、いま改めて学ばなければならないと思ふ。

実は、私も関係した書物なので宣伝めて恐縮なのだが、故・丸

の負担が大きすぎるようになつた場合には、「看護の義務は停止される」とある。それが「週間」とは日本人の感覚では信じられないほど短い。扶養が家族の能力を超えた時、その後の保障は社会の役割となる。ホームや病院の費用は、保険、年金の体系と大きくかわる。そのような社会保障のシステムを作ってきた国と、現在の日本とは簡単に比較はできないものの、「近代」という時代を通過する間に、社会保障のシステムをも同時につくりあげてきた歴史を、いま改めて学ばなければならないと思ふ。

岡秀子さんを中心につくられた農村女性問題研究会というグループが昨年出版した「むらを動かす女性たち」(家の光協刊、一九九二年)という書がある。この中で、私自身は「農村の高齢者問題と女性」という一稿を担当しているのだが、同じ書に、農水省生活課長の大島綾子氏がヨーロッパ女性農業者の立場に関する最新資料の報告が行われていて、高齢化のテーマとともに関連して非常に参考になつたので、紹介させていただきたい。

## 女性農業者の法律的

### 地位確立

高齢化社会を乗り越えるにしても、EC諸国では、高齢化の方策だけが単独に孤立してうち出されるのではなく、女性農業者の地位の確立のためには、「心理的・社会的障害を乗り越えなければならぬ」(『ヨーロッパの女性たち……農業における女性』、EC委員会刊行、一九八八年十月)と規定、それぞの国境を超えて、「女性のための機会均等促進計画」として提言されたものの一貫として位置づけられているの

である。欧洲閣僚会議が「家族経営農場で働く女性」について提言する内容は、「事業の創設もしくは設立と拡張における男女平等の待遇と夫婦パートナーシップ企業の設立を規定、配偶者が行った仕事に対する正当な評価、妊娠や子育て期間中の自営業女性の保護および代行サービスの設置を促進するとともに、加盟諸国が自営業者の団体に女性擁護のためこれら施策の周知徹底をはかる」として提言した指令を採択した。など多岐にわたる。

その提言に基づいて、各国から実情が報告されているのだが、必要報告事項には、女性農業者の法律上の地位と並んで、社会保障、代行サービスの存在などがあげられているのが心に残る。どの項目もばらばらではなく、女性農業者が仕事を続けられるために総合的に意味を持つべき条件と考えられているのだろう。

女性農業者が仕事を続けるようにとの配慮は、つまりは女性農業者を農業経営者として重要な点には依存はないはずだが、それが具体的な制度の上に形に表すのかどうか。そこには、人を大切にする、ということが心のありようや家庭内での思いやりなどにあります。ほやかされてしまう日本との大きな違いがあると思われる。

女性の地位などとからかうたりは女権主義者などと見られたりする。だが、ちょっと視点をずらしてみよう。「嫁きん」というけれども、結婚も職業も法の下で自由意思で選択できることがうたわれている近代法治国家での「嫁きん」は、女性たちからのその産業をめぐるすべての事情への「三々たり半」なのである。冒頭にも触れたように、農業が家族を中心し、天地自然の理に従順に行われる産業というのならば、その特性がより魅力的なものになるようない制度的な工夫も必要だ。女性が夫の補助、あるいは黙々と働くだけの便利な存在と位置づけられているだけでは事態は変わらない。女性が農業経営にとって必要不可欠な仲間なのだと現実を認識して、まず、農業従事者としてしっかりと法律的に位置づけなければならぬ。そのうえで、女性が農業を続けやすいような政策を有機的に国や地域につくらせなければならない。黙々と支えるだけ。そんな時代錯誤の常識の結果、嫁きんがやってきたのであるから。そして、縁をまもり、共同体のいのちを培う食糧をつくるという「特別」の職業への配慮もされなければならない。そのための気の遠くなるような努力に、それをしないで済む人間たちはどのようにして報いたらしいのだろう。自然空間の維持、景観の維持、だれもがそれぞれに役割を持ちあえる共同体としての存在……。こんなにも、多くの機能を有する農業社会は、政策的な意図を持って「保護」すべき対象なのではないだろうか。農村社会への政策的な投資の内容を、国も地域ももっと真剣に考えてもいいと思う。

それでも、走り書きにひとしきりながら、書きながらしみじみ思うのは、現在、ここまで多面的に女性が、いや人間が働く意味を考えさせる職業があるだろうか、ということである。私たちは、二十一世紀を前に、そのことに気がつかなければなるまい。

# 農村女性の果たす役割

北見農業試験場北見専技室

主任専門技術員 片山寿美子

言ふ形で言及しています。  
また、昨年策定された農山漁村の女性に関する中長期ビジョンでも、農山漁村の女性のあるべき姿として、女性の個としての確立とその実現方策が描き示され、農村女性の地位と役割向上の取り組みが積極的に考えられています。  
このような時期、農村における生活の現状をふまえ期待される女性の役割について述べてみたいと思います。

## はじめに

農村では

新しい風が必要  
あつたかい心が必要  
輝き続ける勇気が必要  
頑張れる智恵と技が必要  
あなたの輝いてますか  
あなた輝けますか……。

これは、農業での暮らし方やそこで働く人、とりわけ女性の想いや願いを抑え込み、単に機械を入れるとか、施設を整備するなど経営を築くための条件つくりばかりを優先させていたのでは、本当に

スタミナのある農業や農村が築けない。農村の新しい時代を築くには、人と暮らしに焦点をあてた経営づくりが大切であるとの潮流の中で、農村女性の問題も活発に論議されました。

間もなく開ける「十一世紀に向けて、新しい農業や農村のめざす姿に加え、農村女性のめざす姿も描き示されている。

## 女性を取り巻く農家生活の現状

農村では、農業の問題はあまた有つても、生活の問題はないと言ひきる人がいます。

「金もある、物もある、今や時間もある、女性達たつて結構言いたい」と言つて、やりたい」とやつて、「これ以上何を望むのか

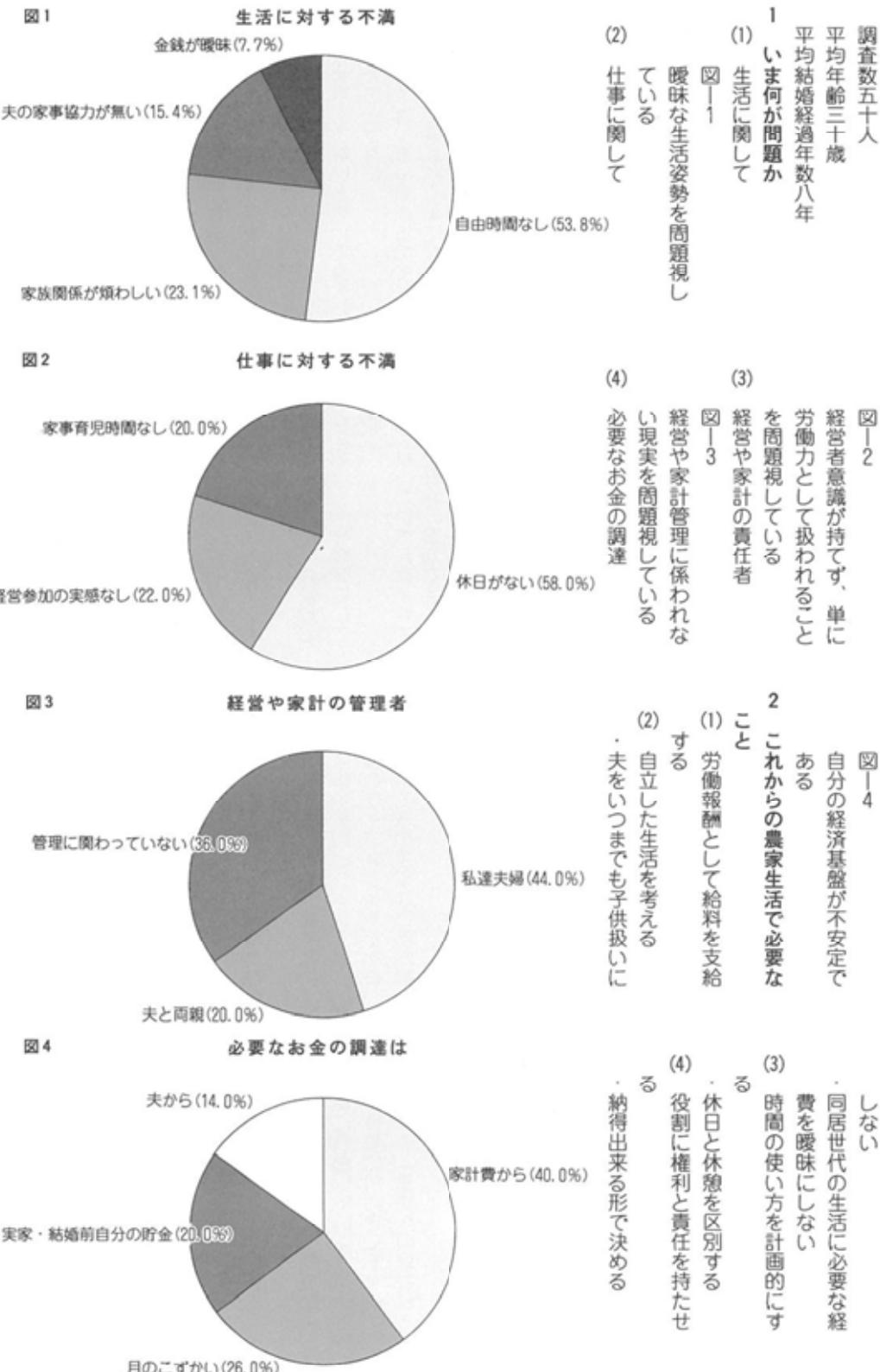
欲を言えばキリがないと言つ意見

が強く、これに同調する女性達も多い。しかし、自分の夢をもつて何か始めようとすればその行く手

### 調査1

農家生活で考えなければならぬこと

湧別町はまなすの会調べ



## 若妻がみた農家生活

十勝中部地区調べ

と言われる農家生活の中には、暮らし方だけにおまかせ農業そのものにも影響する問題が根深く残つており、次のような農家経営の体質が見えてくる。

## 1、問題だと思うこと

- (1) 家計に関して
    - ・専従者給与と生活費が曖昧
    - ・貯金はあっても実際には自由にならない
  - (2) 食事に関して
    - ・食事を美味いと言つて食べたことがない
    - ・野菜ばかり食べる子どもの成長が心配になる
    - ・住まい方に関して
  - (3) 親世代と同居だが生活のルールがない
  - (4) プライバシーが保てない
    - ・経営参加に関して
    - ・労働力参加が主である(パートナーとしては認めていない)
    - ・自分でなにも決められない
    - ・休暇や時間に関して
    - ・一人で外出しやすい
    - ・自分の時間が持ちにくい
  - (5) 現状を見据え、「こんな暮らしやだ! ただ働きもイヤだ! 自分での人生を育てたい、私の人格を認めて」と主張する女性達の声
- これらの調査から、問題はない

を無視せず、女性達の意識を形に変えることを支援していくことが大切であると思つている。

このようないかれていく

## めざす姿と 求められている女性の役割

家族だから当たり前、経営ルールと生活マナーを曖昧にして平和

表面的には、たいへん恵まれているが、その根幹の部分では、非常に脆く危ない要素を抱えて暮らしが營まれていることが分かる。まだ女性にとって、自由と

性に関する中長期ビジョンでは、農村女性のライフスタイルとあるべき姿として次のようなことが描かれている。

1、性や年齢、家格などによる固定的な役割意識を消し、個人が尊重され、本当の意味で人間的で温かみがある暮らしかたが確立されること。

2、自分の生き方を自由に選択し、その結果自信と充実感が持てる

・地域の農業や村づくりの方針決定の場に参画している

・多様な役割に前向きにチャレンジしている(農業への係わり方も)。

・農業経営に経営者として自覚し、参画するパートナータイプ

・補助労働的なパートタイマー

・イフなど、農業に従事する女性が、ライフスタイルの状況に応じて、自分の係わり方を選択できるように、多様な選択肢を用意し意識を変える方向が示されている。

人生八十年代、女性が夫や「いえ」の従属者ではなく、自分の能力を活かし主体的に農業や地域と係わり、魅力の持てる農業や農村づくりの核になることが期待され

る女性の果たせる役割は何か、農村における女性の役割について考えてみたい。

ている。

「このように、農村女性のあり方をめぐり、働きやすく、暮らしやすい条件づくりの方法が身近なものとなるよう検討され提案されているが、これをどのように確かなものとし、実現させて行くかが大きな課題である。

「これらを、どこか遠くで鳴る鐘

の音としないために、農村では生活動普及員らが様々な方法で、農村の女性達から家庭や地域づくりの相談をつけ、女性のパワーアップと問題解決のための活動援助にあたっている。

活動事例から役割発揮の方法について考えてみたい。

## 事例にみる女性達の

### パワーアップ作戦

強くなつて行く。

経営のパートナーになろう  
農業」、ただの働き手として参加

するには寂しすぎる。女だから経営のマネージメントが出来ないと言うのなら、出来るように力を磨けば良い、そのための手始めとして農業経営簿記の記帳を身につけ経営管理に参画して行こうと、あちこちで簿記の記帳から経営管理の学習を始め、パートナーとしてわが家の農業おこしに係わっている。この様な女性達が経営に参画していくと経営の本質は着実に



▲  
経営管理のスピードアップを図るためにパソコンを活用した簿記学習に取り組む（東紋西部区域の簿記講座）  
▼

### 農業簿記コンピューター講座



## 農村の食文化から 地域おこしをしよう

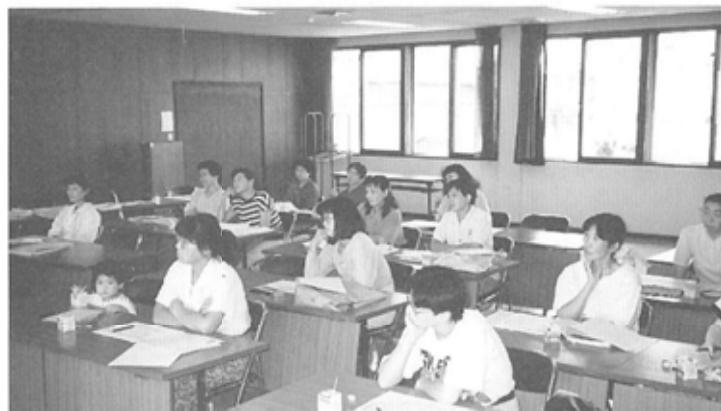
に行われている。

「このほか、農村の景観つくりや、後継者育成等の担い手づくりの活動も積極的に行われている。

農村ならではの食材に主婦感覚の付加価値をつけ、農村から都市消費者へ食文化情報を発信したり、旬の生産物をまごろな価格で届けようなど産直方式の青空市など消費者交流の場を設け、地域おこしの担い手としての取り組みも積極的

に行われている。  
このほか、農村の景観つくりや、後継者育成等の担い手づくりの活動も積極的に行われている。自分が選んだ道だから前向きに楽しく生きてい行きたい。誰のためになく自分のために必要な役割を果たし、その力をつけて行きたいと、健気に頑張っている。

▲ 生活設計講座に集い夢おこしの学習に取り組むお母さん達（東教東部区域）



### 生活の担い手として 夢をもとう

夢の持てる暮らしづくりを考えたい提案があった。こんなお母さんの想いが広がり、簿記帳の活動を、わが家の夢おこしと夢づくりへと発展させることになった。

簿記を記帳し、わが家のマネージメントの力は充分身につき、夫からも認めて貰えるようになったけれど、夢の持てない暮らしが続いていると気づいたお母さんから、



▲ 農産加工の技術を磨く女性達（東教東部区域）

## おわり

「これから農村社会の中で女性



女だからと尻込みしてては前に進めない駄目でもともと、とにかく前に出ること  
が大切と地域加工品の販売とPRにもかかわる

(遠軽湯の里地区で)

に求められる役割には、

(一) 経営の担い手

(二) 魅力ある生活づくりの担い手

(三)

地域づくりの担い手

(四) 後継者育成の担い手

等があり期待もされることながら、  
その責任も重くなってくる。これ  
については、女性が一人でと言  
うのではなく、男性と女性との平  
等なパートナーシップのもとにす  
すめて行こうと頑つのが前提です。  
隠れ星にされていた女性の立場を



青空市で消費者との交流を  
(遠軽湯の里地区で)

反省し女性の力を認め、出番が広  
がりました。

女性自身が頑張る時です。そん  
なこと出来ないよ・と尻込みして  
しまうのではなく、勇気を持って  
前に出ましょ。そのためには必  
要な感性を磨くことが必要です。自  
分に出来る役割をしっかり發揮し  
て行きたいものです。

# 農村に新しい風を

—農家の嫁の立場から—

旭川市生活改善グループ連絡協議会

会長 西島 八重子

## 農家に嫁いで二十年

私自身、農家の主婦になつて二十年余りたちますが、これといつて行動を起こしていることもなく、平凡に年月を過ごして来た一人です。

この間の農業情勢はめまぐるしく移り変り、これに対して不満がなかつた訳ではありません。昔の嫁さんは口答える事なくただ黙々と仕事に従事するしかなかつた。

でも現代の嫁さんは、実社会に出て給料を貰い、人前で発言する機会も多く経験しているので、これから農村にも新しい風が吹き込んで来る事を期待したいと願っています。

私は隣町の当麻町で農家の四男三女の末っ子として生まれました。三ヘクタール程の小さな水田農家、父は大工、母は一番目の兄と農業をしておりました。が少ない面積故貧乏しながら子供を育て教育してくれたのが大変だったようです。兄、姉達はそれぞれの道で結婚し、現在農業をしているのは私だけです。



今年の稲作の状況です。遠くに見えるのがわが家です。（平成5年9月20日）

昭和四十五年から減反政策に入り、実家の兄も「これでは生活していけない」と両親を残し、家族を連れて東京に稼ぎに行きました。両親も六十の年を越え、水田を近所の人に貸して土地を管理しながら、現在八十過ぎの老体にムチ打ちながら一人で生活しております。私は農業高校を卒業しながら、農業とはほど遠いマイクを片手に持ち、お客様相手に道内、近郊を回って歩く職業でした。たまの休日は農業を手伝う事もありました。もともと農業は嫌いではなかったので、結婚するなら一人で一緒に働く農業がいいなあ、大好きな農家で姑さんがいてもいい、お酒に飲まれる人でなければ……

私が嫁いですぐある方が、息子さんも結婚した事だしといって義父に「共済組合の監事を引き受け等ちょっと甘い考えを話していたところ、昭和四十六年に、水田五ヘクタール、肥育牛十頭頃、両親との三人暮らし、妹、弟はいるが妹はすでに嫁いでいるし、弟は就職して家を出ている。田植機が入る等農作業はほとんど機械化され、他の模範となる農家だと言つて、私はちょっと立派すぎる程の家柄で勤まるかな?と思いつついました。嫁が来て後継者が出来、

結婚に対するあこがれと、興味半分でお見合いしたのが、今の主人です。私がこの家に嫁いできて良かったのか、悪かったのか、周囲には高校時代の先輩、同級生、後輩があり、心強く感じた反面、農業自体をあまり深く考えていないからこの職業に飛び込む事が出来たのかかもしれません。

水田と畜産の複合経営で、牧草

## 育児、家事、農作業に追わられて

私が嫁いですぐある方が、息子さんも結婚した事だしといって義父に「共済組合の監事を引き受け等ちょっと甘い考えを話していたところ、昭和四十六年に、水田五ヘクタール、肥育牛十頭頃、両親との三人暮らし、妹、弟はいるが妹はすでに嫁いでいるし、弟は就職して家を出ている。田植機が入る等農作業はほとんど機械化され、他の模範となる農家だと言つて、私はちょっと立派すぎる程の家柄で勤まるかな?と思いつついました。嫁が来て後継者が出来、

の収穫時期になると、空とならめっこして昼食もそこそこに干草作りをしたものです。暑い日の仕事は長くつらかった。畠（あぜ）の草刈りも鎌を使った経験がなく、使い方は教えてくれたが、草と足の指を同時に切つて病院に走り、その夏は仕事にならなかつたのも今となれば昔の話です。



稻の穂の下り具合が例年より淋しいです。堆肥の積んである一角でジャンボカボチャを3株うえ、3ケなりました。何キロあるか楽しみです。（平成5年9月21日）

事も新米の私に仕事を教えるの」、「仕事内容によっては違う事を教える先生役も、両親や主人にとつては大変だったと思います。まして仕事も覚え切らないうちに子供が出来、自分自身嫁いで年数も浅いのに育児、家事、農作業と思うようにならなければなりません。同じ子供を持っている近所の奥様は、「自分の子供は自分

農協婦人部のメ縄作り講習風景  
(夏の間にイグサを取って乾燥してあります)



で育てます。」と言つて子守しており、私が仕事をしている目の前を自転車に乗せて散歩して、実家へ帰つたり三日も四日も泊つて来る。

私は一日泊つて来るのが関の山、近所の奥様がうらやましく思いました。でも小使いは月二万円下さいました。農休日も各部落ごとで違いましたが一日と十五日に決まっておりました。中には人目につかないように仕事している姿もありましたが、小使いも農休日も減反政策が進むにつれ、野菜の複合経営が導入されて以前よりも忙しくなり、自然消滅していきました。

子供が小学校に入学すると経営は主人が譲り受け、小使いも家計費の中から使うように、と言われましたが遠慮でなかなか使う事が出来ませんでした。農休日といつても名ばかりで仕事に追われ、子供と自由にしている時間が少なく学校、保育所の行事のある時だけ、農作業を休んでいたくらいです。自由に使える小使いと農休日が欲しい……と当時は思いました。現在は四人の子供と両親、私達一人

の八人家族にまで増えましたが、農作業には二人手が揃わないと出来ない仕事が数あります。でも年と共に主人や私にも、学校や地域からの役が回つて一家で三人も役が当たると、お互いちぐはぐに出掛けの事が多くなってきて、天候相手の農家の仕事故「これでは農業の経営が思うように出来ない、役害だね」といつて話した事がありません。結婚当時母の口ぐせで「家に残っている者だけがえらい

目に会う。」という言葉が浮んできました。お互い何とか仕事の方はやりくりしながら出来ましたが、それと同時に子供達も成長し、中学、高校、専門学校と進み、お金も羽根がはえたようにどんどん消費は重むばかり、お金のやりくりはなかなか出来ず、組勘が赤になつていぐも当然の事、少しでも黒になるよう努力しなければ……。

## 簿記を覚えて経営を知る

ちょうど普及所主催の農村婦人パワーアップ事業の一つとして、農業簿記の講習があり、私もそれに参加勉強してみました。少しでも簿記を覚えて経営の中味を知る事が出来、今までドンブリ勘定の多かつたものが、数字にハッキリと出て、無駄なものが少しは解消されたように思われました。主婦も数字に強くなると家中が一つになり、私自身も認めてもらう事が出来嬉しかったです。認めてもら

えたというだけで次から次へと挑戦してみたくなり、一日の時間の活用も上手になって、心にゆとりが持てるようになりました。それ故自身、若妻会、婦人部、趣味のサークル等に入し多くの方々と交流の機会を得る事が出来、勉強させて戴きました。人との出会いがこれ程すばらしくもあり、又むずかしくもありと、井の中の蛙だった私も、それなりに成長出来、大変有難く思っています。若妻会

に加入していた時は、同年代で他の支部との交流を計ろうという事

で、本部組織を作る事が出来ました。

## 婦人部会と農産加工で活躍

今は後継者も減り、運営が困難なので婦人部の中の若妻会（今はフレッシュユミセスと呼ばれています）

す）で活動しております。現在東旭川農協婦人部の会員数は八百七十五程あります。又、旭川市には八



農産加工場の中、トマトジュースのびん詰作業中  
左奥の大釜は一度にトマト150kg入ります。



加工グループの仲間と初めての展示即売会  
トマトジュース、冬至カボチャ、シソ、黒豆ジュース等  
(真中が西島さん)

缶詰  
トマト  
シソ  
黒豆  
など  
(びん詰)  
ジユース類

の季節になると予約で一杯です。  
例えば、パック、麺  
から味噌まで出来、旬  
の季節になると予約で  
一杯です。

農協あります。農畜産物加工場が五つ程完成しており、それぞれの地域でフル活動しています。東旭川も平成二年十一月に完成し、東旭川農産加工研究開発グループと称する会員も四十人程おり、農家・非農家の方々が加入して交流を計り、現在進行中です。加工場も販売目的ではなく、自家生産物を持っていき、それぞれの用途によつて、びん詰、缶詰、粉末、真空パック、麺等、それぞれの用途によつて、びん詰、缶詰、粉末、真空パック、麺等、

農協あります。農畜産物加工場が五つ程完成しており、それぞれの地域でフル活動しています。東旭川も平成二年十一月に完成し、東旭川農産加工研究開発グループと称する会員も四十人程おり、農家・非農家の方々が加入して交流を計り、現在進行中です。加工場も販売目的ではなく、自家生産物を持っていき、それぞれの用途によつて、びん詰、缶詰、粉末、真空パック等、それぞれの用途によつて、びん詰、缶詰、粉末、真空パック等、

びん詰＝イチゴジャム、りんごジャム、北五味子ジャム、ミニトマトシロップ漬…  
婦人の方々の工夫とアイデアで暇な時間を作つて農繁期用にと調理加工していく方もおられるようですが、加工場には指導して下さる方がついております。添加物なしの自分達の真心こもった手作りの製品が、時としてお世話になつた方へあげ、喜んで下さつた言葉を戴いた時はとても嬉しいものです。又、地域の生産者と消費者を結ぶ農協婦人部の朝市も毎回好評で、自分の家で食べ切れない農産の少ない新鮮な野菜、果物、花等を持ち寄り、朝九時から店舗前で開店するんですが、二十分程度品切れする程、売る方も買う方も真剣で大変な繁盛振りです。消費者との交流も十年程になり、次回はどの

ちゃのポタージュ、冬至かぼちゃ小豆入り、黒豆煮、煮コンブ、ナシ粉、山わさび、かぼちゃ、人参、ヨモギ等

ような品物が並ぶかを楽しみにしながら、どんどんふれあいの場が広がつて行く様子がこの目でハツキリと伺えます。(朝市は七月上旬から九月上旬まで毎週土曜日)現在私は主人と一緒に水稻七ヶ町アール、黒大豆四〇アール、緑肥用デントコーン四〇アール、二

農村婦人大学を受講

又、この四月から道内では初め  
ての農村婦人大学が北大の太田原  
先生を学長に出来ました。旭川農  
業一世紀塾の女性一人が熱心にあ  
らゆる方面に声を掛けられ、この  
春開校の運びとなり、四十四人の  
受講生で出発した大学です。期間  
は二力年で、今始まつたばかりの  
学校に期待するものも多く、年間  
の予定表を見ますと立派な講師の  
方々の名前が並び、いろいろな分  
野で活躍されている先生方の話を  
聞き、お互い視野を広げ勉強させ  
て頂きながら、月一回の受講を毫  
しみに農作業に精を出して頑張る  
うと思ひます。四十半どは言え、

家庭でも地域でも皆様と共に協力し美しく年を重ねて過ごせるよう努力したいと望んでいます。昭和四十五年の減反政策の始まりと減反緩和の現在まで二十年余り、農業をやってきた経験の中より改革出来ればと思うものが少しあります。

ソニク一〇アール、自家野菜二〇アールを耕作しております。暇をみつけては近所の農家にパートに行く時もあります。その時の収入はわずかでも私に入るのですが、小使いになつたり、家計費になつたりで自由に使えるのでとても楽しみです。



農協店舗前での朝市風景。匂の野菜を持ち寄りで、売買は盛況です。

二つ目は、労働に見合った報酬と農休日を取り入れて欲しいです

ていなければ、これから後の後継者はついていかれないでしょう。

ね。いくら農業にも機械が入り楽になつたとは言え、機械を使っているのは夫、裏方のこまごまとした仕事は妻が多く、農作業の長時間労働、育児、家事と一人何役もこなさなければ一日が終らない。やはり農業は「つらい」と思っている人は五九%あります。一生懸命働いても自由に使える小使いがない、休みがない、時期的に忙しい事はあるが、仕事と休みのケジメをつけ、計画性のあるものにしなければこれから若いお嫁さん達も残らなくなるのではないでしようか? 今の老人(老人と言つても若々しい方が多い)は、年金を貰つて温泉です、ゲートボールです、趣味の会です、と言つてお金と遊ぶ時間があり、若い者にはうらやましい限りです。

三つ目は、男だから、女だからといふ役割分担をなくし、女性もいし、これから農業は、農業人口の半数以上が女性の肩にかかるべきでいると思います。もつともつと計算に強くなり、組勘の見方、経営簿記の普及等勉強していく

も良いのでないでしょうか。又、お互いの意見を述べ、能力を出し合いながら、女性の地位向上を計る場所もあつたっていいと思います。

四つ目は、婦人グループ生産者と消費者のつながり作りが必要になつてくると思います。朝市や加工場の利用で農家と消費者の交流を深め、農業以外の人々の理解を

## 真（新）の農業展開の道を



畠の一部に北五味子（薬草）をうえています。  
父が栽培しており、収穫作業風景です。

これから真（新）の農業を展開

幅広く求めて行かなければ、これらの農業には厳しいものがあるのではないかでしょうか? 女性だから出来るというものを作り、見出しても健康管理や温みのあるゆとりの生活、二十一世紀に向けて、子供達の将来のある環境を目指して、婦人のパワーをフル回転出来るようなものにして欲しいと願っています。



油をとるためにハウスの空地にひまわりを植えました。左に干しているのは北五味子（薬草）です。用水路には昔のままウゲイが泳いでいます。

して行ける道を作つてあげる役目を少しでも果せるよう努力したいのです。

酪農を始めるに当たり、やりたい事が二つありました。一つは、家庭菜園を作り自給自足をする事。もう一つは、牛以外のたくさんの動物達と暮す事。やりたい事というより、乳牛・家庭菜園・牛以外の動物、この三つはワンセットで、三つが揃わないと酪農とはいえないという事に、いつの間にかなってしまっていたのです。

# 酪農に託した夢

## 乳牛と家庭菜園と動物達と農村生活

### 小さな菜園で新鮮な野菜

それで、早速小さな菜園を作りました。しかし一夏が過ぎると、当初の目標は、自給自足を目指すと変更されました。とても野菜までは手が回らない、という現実の一撃を受けた訳ですが、同時に、決して切り捨てる事のない目標にもなりました。

た分だけ収穫の喜びを与えてくれたのです。しかも、スーパーではとてもお目にかかるような物ばかり。イボが針のように痛いキュウリ、包丁の先を少し刺しただけで、自分で割れてしまうキャベツ。透明なまでに水々しい大根、口の中で溶けるように柔らかいサニーレタス等々。どれも皆、追肥さえしないのに大きいを通り越して巨大である自然は見捨てる事なく、汗し

たのですから、スーパーでいう「新鮮」とは比べようがありません。土の上になっている野菜を見て、初めて新鮮という言葉の意味を知

### 日本の農村文化にも 誇れるものはたくさんある

食べ物を無駄にしない農家の恵にも又、感心させられます。漬物に代表される様々な貯蔵方法を心得ており、高価な文化機器に頼らず、自分の手に負える、いわゆ

りました。

（公社営農場リース事業）  
昭和五十九年入植者

円 康 子

最近はグルメブームで、評判の店には行列までできるそうですが、農家にも行列する価値はあると思

います。貯蔵、輸送を前提としたため、水々しく柔らかい、それゆえに傷みやすい野菜は、この畑に来ないと手に入れる事ができないからです。

おそらく私は、最も一般的な都市生活でしたが、幸運にもこんな野菜の姿を知るチャンスに恵まれました。チャンスに恵まれなかつた人達は、まだ知らずにいます。そんな人達が子供を生み、どんどん世代が繰り返されて、いつたらどんな物が食卓に並ぶのか、考えただけで恐ろしくなります。

た私になど、見るとやるのとは大違いで、到底真似できるものではありません。これは一朝一夕ではできないプロの仕事です。季節の移ろい・気候・環境すべてを総動員し、巧みに無駄なく利用して食卓を潤す。ここまで来ると、農村文化を感じます。

農村婦人といふと、ヨーロッパの女性が憧れを込めて理想のように言われますが、日本の農村にも誇れる物はたくさんあります。日本人の場合は、アピールの仕方が下手という事もありますが、ます何よりも、経済追求型の農業の中で疲れきついて、アピールするエネルギーが残っておらず、受け

取る側も、農業について考える必要性がないので関心も示さないのではないかでしょうか。両者が高い壁で隔っています。欧米人は自然の中で遊ぶ事が上手です。日本人のように、「元あつた自然を『整備』」という名の元に壊し、水道・トイレ果ては温泉まで完備したキャンプ場で、一枚をはたいて買ったキャンプセットを持ち込んで、という人はいないでしょう。ただ林の中を、鳥の声を聞きながらのんびりと散歩する事に喜びを感じられる人が増えれば、必然的に農家じめ目が向いてくるのではないでしょうか。歐米人の自然観に、私は憧れています。

## 動物達の楽しさ

さて、もう一つの「牛以外のたかさんの動物達と暮す。」というのも又、「仕事と遊びを共有する。」になりました。趣味で飼つつもりでしたが、これが意外と役に立つのです。放し飼いの犬のお陰で、キツネ、イタチは悪さをしに来ません。猫のお陰で、ネズミの被害

はなくなりました。住宅・牛舎まわりの草刈りは馬がしてくれます。人や馬が食べない草や傾斜地は羊が食べてくれます。自然の偉大なる摂理です。互いに競合する事なく、共存できるようによく作られていました。

たくさんのおまけもありました。



犬も馬も家族の一員、家の前で記念撮影。

冬は犬ソリ・夏は馬に乗って遊び、羊は羊毛や肉を提供してくれます。そんな遊びも最近ではそこそこでできるのでしあが、ここでしか見る事のできない、写真にさえ写せない愛嬌者のいる風景があります。朝夕の牛舎の時間になると牛舎の前に座り、顔が見えると遠くから駆け寄って喜んでくれる犬、飼槽のトウモロコシは自分のものだと言わんばかりに、牛にワンと一声吠えて、牛と顔を突き合わせて食べている犬、犬と猫のキッズ、サイレージを運んでいる間じゅう、後について来る犬のよつな猫、牛の中で威張っているけれど、一人

になるといい馬。広い草地を人間の都合でひいた境界などおかげで、尾を上げて疾走する脱走した馬、飼い主と飼われる者と、いうより、家族という方がピンと見えた事のできない、写真にさえ写せない愛嬌者のいる風景があります。朝夕の牛舎の時間になると牛舎の前に座り、顔が見えると遠くから駆け寄って喜んでくれる犬、飼槽のトウモロコシは自分のものだと言わんばかりに、牛にワンと一声吠えて、牛と顔を突き合わせて食べている犬、犬と猫のキッズ、サイレージを運んでいる間じゅう、後について来る犬のよつな猫、牛の中で威張っているけれど、一人

子で共に一緒に仕事をする。仕事といつても、畑へはパンとジュース持参でピクニック気分。ついで夕食分の山菜も取つたりして、牛追いは子供の手を引いてと、遊び心さえあれば、催しは盛沢山です。

## 農村こそ夫婦共働きの職場

夫婦のあり方にしても、文字どおり肩を並べ力を合わせて同じ仕事を励みます。余談になりますが、私はこれが本来の共働きという意味で、別々の職場で別々の仕事をするというのは別働きといつて区別しています。共働きは同じ仕事をするので、共通の話題には事欠きません。知識や技術・力の足り

ないと、うは補いあえるので安心です。お互いが気持ち良く仕事ができるよう、気をつかい、時間をやりくりしてコンビネーションを高め、二人合わせると三・四人という労働能率を生み出す努力をします。「さすが、お父さん。」と父親の権威は高まり、「おやじ元気で、家に居て!!」となります。

親子・夫婦といった家族のつながり、人間らしいあり方というものを感じます。一日中一緒に仕事をから、良い事も悪い事も派生するのも、これ又事実で、決していい事ばかりではないのですが、少なくともサラリーマン家庭では、あり得ない事だと思います。

動物が大好きという実習生が、帰り際に牛の事ではなくて「家族」というものを強く感じた。観光で通り過ぎるだけでは、もったいない」と言つてくれました。今に

## 農業の本当の姿を知つてもらいたい

農家は三・四たといふ悪い評判が先行していますが、最近は機械化が進み、随分と形態も変わっていますし、世の中にはもうとつとつと厳しい仕事が沢山あります。企

業戦士となつた御主人と時間帯のズれた生活を強いられ、会話を満足にできない奥さん。数字に追いつかれ、上司と客との間で板ばさみになつて、セールスマン。一日中ネジ回しで、朝起きても自

して思えば北海道酪農に憧れて、生まれて初めて実習に入つた時、牛よりもおじさんやおばさんのつやつやした頬と、大きな声で大きな口を開けて家族みんなが笑つている光景の方が、強く印象として残っています。おそらく、その時から酪農というより、酪農家の生活をしてみたくなつたのだと思ひます。家族のコミュニケーションの場として、家庭菜園、動物が三點セットとして加わつたのでしょうか。

農家は三・四たといふ悪い評判が先行していますが、最近は機械化が進み、随分と形態も変わっていますし、世の中にはもうとつとつと厳しい仕事が沢山あります。企業戦士となつた御主人と時間帯のズれた生活を強いられ、会話を満足にできない奥さん。数字に追いつかれ、上司と客との間で板ばさみになつて、セールスマン。一日中ネジ回しで、朝起きても自

誤解やトラブルを招かないように、正しくそれを伝えるにはどうした方が良いか。その方法を模索中です。例えば、この先何年も取れるよう大事に守り育てている山菜を、悪意ではなく、取り方を知らないだけかもしれません。根こそぎ取つてしまったり、丹精込めた牧草地の中に車で進入し、畑を傷めしていくというトラブルがよくあります。苦労したからこそ「もったいない」という言葉が出るのですが、それをケチだと誤解されがちです。確かに仕事は大変で汚いけれど、雨の日や冬期間は休めるし、晴れた日に広い草地を大型トラクターで走り回る等、それを相殺する以上の喜びや楽しみもあるという事も知つて欲しい。私達の生き

生きとした表情や、テキパキとしたプロの仕事ぶりを見せたい。農業の良いところも悪いところも含め、偏見や誤解抜きの農業の本当の姿を、遠まきにしている人達に知つて欲しい。

たくさんの人間に伝えると無理がありまでは、稼業を考えると無理がありますが、少しの人にだけでも深く理解してもらいたら、その人達がまた友達に伝えていく…と、その輪が広がれば、今までの農業に対する見方も少しずつ変わってくるのではないかと思うのです。そうすれば、現在の経済追求のみに走っている農業の方向も、環境問題への取り組み方も違つてくるのではないかと。

## 知識や技術・情報を交換できれば一石二鳥

とんでもない大きな話になつてしまいましたが、話を現実に引き戻しますと、私の場合理解して欲しい人達とは、農業に関係する事（土・植物・動物）に関心があつ

生きとした表情や、テキパキとしたプロの仕事ぶりを見せたい。農業の良いところも悪いところも含め、偏見や誤解抜きの農業の本当の姿を、遠まきにしている人達に知つて欲しい。

たくさんの人間に伝えると無理がありますが、少しの人にだけでも深く理解してもらいたら、その人達がまた友達に伝えていく…と、その輪が広がれば、今までの農業に対する見方も少しずつ変わってくるのではないかと思うのです。そうすれば、現在の経済追求のみに走っている農業の方向も、環境問題への取り組み方も違つてくるのではないかと。

## 都市と農村が共存できれば

— 共存 — 異質のものがそろつて生存（存在）する事と辞書に書いてあります。私は、今この共存に凝っています。元々、牧畜とは人の食べれない物を動物に与えて、肉や乳を得るという共存の技術でした。都市部と農村部の共存。自然と人間の共存。

私は、生活の場として農村を選んでいましたが、芸術や音楽の頂点レベルの物を直に見れる都會も捨て難い魅力があります。他の動物と人間の最も違う点が、芸術・文化を生み出した事なので此からだとしても、気持ちのうえで近くなり共存できれば、もっと暮らしやすくなるでしょう。そうすれば究極の目標である、自分の子供達が農業を、農業を選んだ私達の人生をも認めてくれる、そんな榮誉があやかりたいと思います。

たり、田舎ならではの楽しみ方を知つてゐる人、バードウォッチング、カヌー、釣、天体観測、山菜取り、リース作り、草木染等々、まだ知らない遊びの方もたくさんあ

るかもしません。これらの遊びを楽しむためには、ちょっとした知識や技術がります。住宅のすぐ傍まで鳥が飛んで来るので、名前が知りたくて野鳥の本を買いましたが、どれが何という鳥なのか、本と見比べてもよくわかりません。星がすばらしいからと、星座の本を買ってみましたが、どれがどの星だかさっぱりです。これは教えてもらった方が簡単です。趣味を通してできた友達は、昔から知り合いであるかのように話ができます。これらの趣味や、農家体験を媒体として、まず身近かな非農家の人と交流をし、お互いの持つている知識や技術や情報を交換できれば一石二鳥です。

# 農村と都市の 生活情報チャネルを開きましょう

## ～農村女性へのメッセージ～

コーパスっぽろ生活文化研究所

所長 田端 弘子

### まずお互いを知り合うことから

全国的な低温や台風などの影響で、野菜の代表格のキャベツの高騰が報道されました。発端は、特に不作だった九州地方の市場が行つた広域集荷が、高値に吸引された集荷シフトを発生させた結果、首都圏その他のキャベツが大幅に不足して例年の五~八倍もの高値に

なったということでした。主要野菜には産地指定の制度があるようですが歯止めにはならず、流通機構に踊らされる消費者と生産者の姿が印象に残りました。狭い国内の現象だからまた鎮静も早いでしょうが、「これを国際市場で考える」と大きな不安を感じました。

我が国の食料自給率がエネルギーベースで四六%とか、五〇%以上を輸入に頼っていることになりました。ですから、世界の下宿人が扶養家族と同じだといふことはないでしょうか。しかも、もっと高い自給能力があるにも拘らずにです……。

「農業は国民生活の基



平成5年度産消空交流会（農水省ガイドライン研修会・道央ブロック研修会）



穂別町の「減農薬・減化学肥料メロン」のハウス見学

盤」という潜在意識が強いのは、私が屯田兵の三代目に当たるせいででしょうか。戦後の骨身にしめる食糧難を知っているせいであるかもしれません。

現在、農業が直面している様々な困難や「貿易自由化」の大波

は、農業を常に「国策の員」にしてきた避けられない「ツケ」だと思う気持ちが強いのです。「ツケ」を払わなければならぬのは農業従事者の皆さんだけであってはならぬ筈です。こ

う一番は国民の頑張りどころではない。農業従事者たちは、農業を常に「国策の員」にしてきた避けられない「ツケ」だと思う気持ちが強いのです。「ツケ」を払わなければならぬのは農業従事者の皆さんだけであってはならぬ筈です。こ

と思います。しかし、「国民全体の責任」と言い切ると気持はスッキリしますが、かえつて問題を他人事に置き換えてしまって、まず自分の生活から農業を考えることから始めたいと思うのです。それには、女性同士が農村生活者と都市生活者として、お互いを知り合つことがスタートだと思うの

ですが……。でもその機会はほとんどありません。産地見学やその後の懇談会で話し合えるのは、男性ばかりなことが改めて残念な気持ちがします。

こんな気持を込めて、就農労働力の六割を支える農村女性に、私なりの「メッセージ」を送りたいと思います。

## 協同組合の仲間として柔軟なネットワークを

私が農村女性と同席する機会を得たのは、九二年ICA東京大会での「ICA女性大会」でした。全国農協婦人部の代表の方々の堂々とした発言や、交流パーティーでの明るい国際交流ぶりに示されたパワーに接して、さすが現役女性の発散する力強さに圧倒されました。大会資料によると二百十六

万人という大きな組織力をもつ婦人部であること。その活動も、農産加工品の生産、学習活動、健康

や高齢者問題など多様な内容で流れだと思いました。しかし全国組合員における女性の比率でした。組合員における女性の比率でした。農業従事者の六〇%を占める女性が、組合員構成比では僅か十一%

女性理事は〇・一%という現状報告には、理由があるのでしょうが、残念な気持ちになりました。生産者の協同組合である農協と消費者の組



浜のおかあさんの料理教室

織である生協を比べてみると、男女の性別役割分担が見えてきます。生協では、組合員の九五%が女性であつ

が一般的で、女性は家事と育児（介護）と仕事の三役を背負つているのですから、生協への男性の参加にはまだ時間がかかりそうです。しかし農村では、女性が基幹的農業従事者の半数を占めていることを考えると、農協にとって女性の組合員参加が重要なと思われます。

ICA女性大会でイギリス代表が報告の中で、「ロツチメール開拓者生協によって、女性達は自ら



出資して口座をもち、配当を受けることが出来るようになった。国政への選挙権を勝ち取るずっと以前に、生協の中では選挙権を与えられていた。その後、婦人ギルドによって組織化された女性として教育と訓練を受けることができ女性の社会的地位を向上させた」と協同組合が女性運動の大好きな「掲げか」であつたと指摘し、「女性の影響力を發揮する」には、①物事に対する自分の姿勢を確かめる方法を学ばなくてはならない。②チャンスを逃がさず責任を引受けること、またそんな女性を積極的に支援すること、③まだ男性社会だからと自分をこまかさない。④女性は忍耐の訓練が充分出来ておるからリーダーやパートナーとして最適である。⑤男性陣と衝突し合うだけでなく、協力し合えることを示すことが重要である」と呼びかけました。協同組合の長

い歴史を持つイギリス代表の発言として心に残りました。

「ICA女性大会を機に」「協同組合における女性の参画」について論議が活発になっています。この好機を生かして、協同組合の仲

間として柔軟な女性のネットワーク組織を作りたいのです。特に、異業種間の交流が出来にくい女性にとって、視野を広げ頭を柔らかくするのに役立つと思いませんか。

## 農村と都市が近くなる関係

「面白いゾ 高校農業科」の見出しで、道新(9/7)が農業科の入試倍率が年々増加していく、受験生の八割が都市サラリーマン家庭の生徒であると報道していました。この背景には、学校側が農業以外に食品加工や流通、緑地観光学科、など幅広いカリキュラムを設定したことで卒業後の進路選択が広がったことや、中学時代に机の上での勉強に興味を持てなかつた生徒たちが「高校で同じ三年間を送るより」と農業科を選択する例も多いとしています。「農業科に進学して生き生きと過ごし、人柄まで明るくなったケースも多い」という農業科教師の話や、「農業科に来て本当によかった」「すつかり農業が好きになり、卒業後は

農業系の大学を目指している」という生徒の言葉を読んで明るい気持ちになりました。農業後継者の進学が減っている点が気になりますが、農業の魅力を知った青年が着実に増えることを期待したいと思います。

昨年、漁協婦人部の方々が講師になって魚食普及を目的にした「浜のおかあさん料理教室」が十回行なわれ、三百名以上が参加して好評でした。テキパキした段取りと説明に生協組合員から賞賛の声が送られました。毎回違った単協が講師役でしたので、十単協の漁協婦人部の方々と接することが出来たのも収穫でした。何より興味のあることですから、参加者も熱心で質問が多いことも良い関係

づくりの条件ではないでしょうか。ぜひ、農協婦人部の方々を講師にした「料理講習会」を実現させたいものです。

産直活動の産地見学も十二農協に及び五百八十四名が参加しました。

参加者がそれぞれ店舗の集まりで「自分の言葉」で報告するのが自然体で、意外と利用結集に伸びる場合が多いのです。「裸足で畠の土を踏ませてもひつたのよ、ふわっと柔らくて、少し掘つたらミニミズがいてびっくりしたけど、有機栽培を目指して三年なんだって」「うつそお」「あら?」「草取りを手作業でやってたわ。農業の回数を減らしてるとんでもすつ」「大変なのねえ」という具合で言葉少なですが、実感が伝わって生産地が近く感じる報告会になつているようです。

今年は新たに、穂別町と画期的な産直がスタートしました。穂別町が農産物表示ガイドラインに準拠したモデル事業に挑戦する「減農薬・減化学肥料メロン」の全量を引き受けるパートナーとして、コープさっぽろが穂別のメロン生産者に大きな応援を送る関係になつたのです。この「減農薬・減化学肥料メロン」は、生協の店頭で他のメロンと一緒に並んでいますが、小さなタックがついていて、それには責任の所在に「穂別町・コープさっぽろ」の連名が記入されています。こうした関係が他の作物にも広がってほしいと思います。生協の役割は、意欲的な生産者との産直を拡大して、道内により多くの先進生産地を広げるパートナーの存在にあると思います。この産直活動を生産者と消費者、農村と都市とを近づける糸になるように望んでいます。

## 農村と都市の生活情報 チャネルを開きましょう

今日の情報化社会といわれる中

で、核家族化、高齢化、少子化な

ど社会の構造の変化や女性の生き方の変化が加速的になっています。それに伴って、家族のあり方や生活スタイルの多様化が進行しています。食生活をみても、加工食品の増加、外食、偏食、個食（家族

が同じ食卓で別々の食事を摂る）、孤食（一人で食べる）、などが進んで食事が家族の団欒の中心でなくなりつつあるようです。

日本生協連合会の「全国くらしの研究会」が、九二年に行なった

アンケート調査「小学生（五年生）の生活と食事調査」をみると、生活の変化が子供たちの食生活に大きな影響を与えてることがわかります。この調査は、全国各地の協力を得て行なったもので、

母親たちの食生活はどうでしょ

表-1 小学校5年生の食事調べ（1992年）

■誰と一緒に食べたか  
日本生協連合会  
全国くらしの研究委員会調査

	全員で	1人で	子供だけで	大人も一緒に	無回答
朝食 全国 (札幌)	14.9%	23.6%	20.4%	40.2%	1.4%
夕食 全国 (札幌)	41.3%	5.2%	6.7%	45.8%	1.0%
	11.9%	26.9%	20.4%	38.7%	2.8%

対象者数=1458（札幌108）

■食事は楽しかったか

	楽しかった	つまらなかった	なにも感じない	無回答
朝食 全国 (札幌)	37.4%	10.7%	50.1%	1.4%
	26.8%	11.1%	59.3%	2.8%
夕食 全国 (札幌)	64.3%	7.1%	27.3%	1.4%
	42.6%	10.2%	47.2%	0

対象者数=1458（札幌108）

■10年前の調査との比較

◆誰と一緒に食べたか

	<朝食>		<夕食>	
	全国82年	92年度	全国82年	92年度
家族全員で	22.4%	→ 14.9%	40.9%	→ 41.3%
1人で	17.8%	→ 23.1%	9.1%	→ 5.2%
子供だけで	20.1%	→ 20.4%	7.6%	→ 6.9%
大人もいた	38.2%	→ 40.2%	40.5%	→ 45.8%
無回答	—	1.4%	1.0%	

対象者数=1458（札幌108）

◆コメント

①朝食について 前回調査に比して1人で食事をする子供が5%増えた。子供だけの食事が37.9%から43.5%へと5.6%増えた。

②夕食について 家族全員での食事は変化がないが大人が同席する比率が増加した。特に、1人での食事が4%ほど減少した。

③食事に対する姿勢

僕たらしい中で摂る朝食については、夕食に比べて「楽しい」と感じる子供が37.4%と半数を割り、「つまらなかった」と感じた子供が1割、「どちらとも感じない」子供が半数をこえている。実に無感動な朝食風景が浮き彫りにされた。特に、札幌の子供たちは、全国平均に比べて朝食で70%・夕食でも約60%が「どちらとも感じない」「つまらない」と回答している点が注目される。

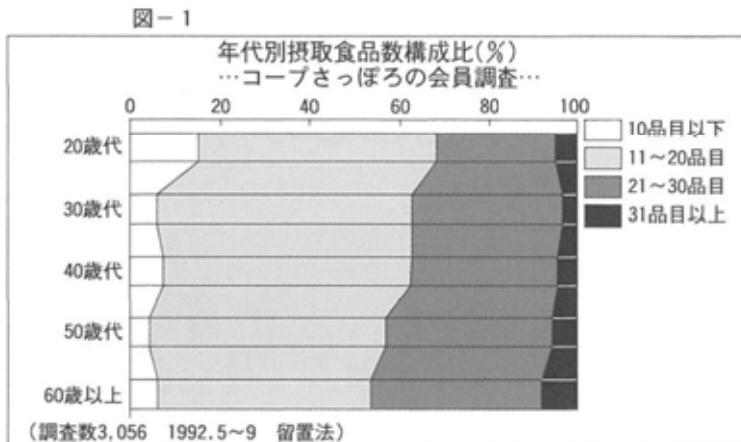
調査対象は千四百五十八人（うち北海道が百八人）でした。このなかで「昨日一日の食事」について、「誰と食べたか」と「どんな食事だったか」を聞いています（表一）。

注目されるのは、①朝食を一人で食べた子供が、全国平均で三・六%。札幌では四人に一人が自分で食事をしていることです。十年前の調査から五%増えていることがわかりました。また

「子供だけで食べた」二十%と合せて約半数の子供たちは親と一緒に食事をしていないことも気に掛かります。夕食は、さすがに家族の顔が増えますが、それでも「一人で」「子供だけで」が合わせて二割強です。②次に「どんな食事だったか」については、「楽しかった」が三割。「つまらなかった」一割、「何にも感じなかつた」という子供が六割を占めました。親と食事を共にしない、各自に好きなものを食べるという食生活の変化のなかで、料理方法や本物の味や匂いを伝えることは難しくなっています。

うか。図一は、コープさっぽろのコープモニターグループの「三色栄養バランスチェック調査」(九二年)による「年代別摂取品目数構成比」です。栄養バランスを保つには一日の摂取品目が三十

以上が望ましいのですが、各世代で二十品目以下が過半数を占め、特に二十代で十品目以下の比率が高くなっています。好みの食べ物に偏りやすい傾向を窺うことができる調査結果といえます。図二は、コープさっぽろの

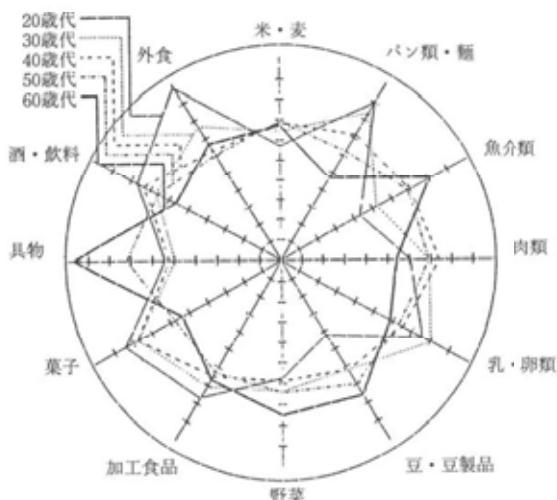


事にかかる時間は昭和四十年代と二十代では米食よりパン類・麺が中心であり、副食費のバランスにやや欠けて加工食品と外食が突出している。嗜好品の支出が高い傾向が示されています。

生活の中で、生活は多くの関心事の中の一つになつて、相対的に位置付けが後退したといわれています。NHKの「国民生活時間調査」によると、家庭婦人の炊

五年から平成一年までの二十年間で二十八分短縮したそうです。女性の有職率が高くなつたことが主な要因とか。しかし、誰もがバランスの良い食事がしたいと思っているはずです。素材のうま味を生かしたものもう一品が加わるような「食の情報」が、魅力的だと思いません。農村の女性は、農作業と家事とで労働時間が長いことが知られています。忙しい中で、農産物の本当の味を生かした料理法の知

図二 食費の費目別支出割合の平均に対する年代別相対比較  
(コープさっぽろ家計モニター、延べ950人の集計)



恵がきっと沢山あるに違いありません。農村と都市の生活情報を交換し合うことが、お互いの距離を近づけるスタートになると思います。生産者と消費者の関係が、これまでの「売り手」と「買い手」の関係に止まるなら、農村女性の姿は見えにくいと思います。ぜひ、生活情報のチャネルを開いてお互いに活力のある二十一世紀の生活文化づくりに備えましょう。

# 「若妻の翼」ヨーロッパへ飛ぶ

## — 冷害の村から村おこしの村へ —



ドイツのフランクフルト市内にて、翼のメンバーとともに

福島県相馬郡飯館村在住（農業）

高橋 美佐子

今年の夏は、北海道南西沖地震、台風十一号・十三号による鹿児島豪雨の災害と、自然の力を大きさと怖さ、人間の脆さを見たような気がしました。

さらに私達農家は、雨や日照不足の異状低温の影響で、米の収穫が見込まれない状態です。私の住んでいる村は、周期的にヤマセに見舞われ、たびたび冷害凶作に泣いて来た村です。今年は昭和二十八年と昭和五十五年の大冷害を上回る冷害が確実となり、農家の経営は大きな打撃を受けるでしょう。収穫皆無になり、そのたびごとにニュースでテレビや新聞紙面を賑し、県内の代表的な「冷害の村」として知られて来ました。従つて冷害に強い畜産に力を入れて来たのですが、これとて牛肉の自由化による価格の下落など、暗い影をおとしています。そんな暗いイメージをとり払うかのような明るい話題の多い村それが飯館村です。

「ミートバンク」「牛肉フェスティバル」「ぼら吹き大会」などユニークな村おこしを進めており、近頃は「冷害の村」から「村おこ

しの村」に変身しつつあります。その「ほら吹き大会」で、ある一人の主婦が「二十一世紀には、お母さんたちが海外研修に行く『村営主婦の翼』が実現しているはず」と提案しました。それがきっかけとなって平成元年に「若妻の翼」が実現したのです。



スイス・ユングフラウヨッホ観光登山電車の中で



スイスの市営農場で農場の婦人とNHKディレクターとともに

## 若妻の翼 —お嫁さんの海外研修—

村内に住む二十五歳から四十歳までの女性、つまりお嫁さん対象の海外研修です。平成元年から今年で五回目になります。私は二回

目の「若妻の翼」に参加しました。農家の主婦が秋の収穫の一番忙しい時期に、十二日間も家庭を空けることは大変な本人の勇気と、家

族の協力が必要だったのです。実際に私も大変でした。嫁は姑に従い、夫に従い、ひたすら仕事をする嫁が「良い嫁」という一般的な風習がまだ残っている所です。更に「なぜ息子も行かない海外に嫁が先に……」など言われる環境もある中で、そんなふうに自分たちの殻にとじこもっていた女性たちが、一気に飛び立ち自分の

目で見、肌で感じて来たヨーロッパ研修の十二日間でした。

この海外研修でほとんど女性たちが、カルチャーショックを受けました。日本と同じ農家なのに家のまわりを花で飾り、日曜日に教会へ礼拝に行く時間が本と同じ農業を夫婦で助け合って行い、農機具は自分で直す。代々受け継がれた家具を使う。物を大切にすること、時間を有効に使うこと……等々教えられることばかりでした。同じ農村女性である私たちはすっかり考えさせられまし

た。

またドイツのフランクフルトでは、女性の駆け込み寺となつてゐる「婦人の家」を訪問。そこでは、何らかの理由で家庭から逃げ出した女性や子供に安全を確保し、精神的、経済的自立への援助をする。女性の自立についてすっかり考え方せられる研修でもありました。女性は常に我慢をし、耐えて生活をしてきました。従つて社会問題を自分の生活に関わりないという形で済ませ社会に目を向けずにきました。「婦人の家」の視察で今までいかに社会に目を向けてこなかつたか反省し、もっと社会問題に关心をもつて視野を広める必要があるとつくづく感じました。男女が互いに、相互の人格を認め、尊重し助け合つて、自立した男女共生の社会の姿に、感動さえおぼえた十二日間でした。翼に参加した女性たちは、自分自身の殻を破り自分たちの意見を堂々と言い、人の意見を素直に聞ける広い心を持つようになつた。帰国後、彼女たちは、自分たちの力でいろいろな活動をし始めました。

## 女性の声を響かせて

男女共生社会  
の実現へ  
ヨーロッパ旅行内容を、本に出

は女性の存在も大きくなつてきて  
います。今では、村の審議会や委  
員会にも必ず女性が半数含まれる  
ようになりました。私の村は、女



ドイツの宿泊先にて、ビクトリア・エーダさんとともに

めようとしていますが、現実はまだ封建的、閉鎖的な農村ですから思うようにはいきません。しかし「若妻の翼」に参加した女性たちの中からは少しずつその変化が出てきています。

### 我が家は給料制になる

版したり、ビデオテープの制作をしたり、テレホンカードを作り村の特産品にしたりと、一人では出来ないが、多くの仲間で力を合わせ、実行し行動した女性のパワーは、男性以上かもしれない。村では男性中心の村政でしたが、最近

性の声を大いに取り上げ、村政にも女性の声を「響かせ」ています。そして二十一世紀に向かつて男女共生社会を作り上げるために男女のかかわり合いが非常に大切になると村は見たのです。村が二十一世紀に向つて、男女共生社会を進

の一つは、家庭内のお嫁さんの立場への考え方と妻のあり方にについてです。一昔前の男女差別の習慣が強く、女性は、男性より低く見られ、農家では、もくもくと働く嫁は「良い嫁」と言われ、給料や休暇もなく、経営参加の発言権もなく無償の労働供給者にすぎなかつたが、まず家庭の中から変えなくてはと、夫や家族と話し合ふようになり、月に二日の休日を設けたり、農家の女性は、農業と家庭を両立させ、キャリアウーマンであるのに農業労働の報酬がない。農家の女性は共同で働いているのだから正當に評価し、その実態に応じた労働報酬を払うことで家庭一人ひとりを尊重し、責任も果すことが一人前の人間だ。家族だろうが他人であろうが農業労働

に報酬を払つことが「当然」となつてこそ農業も職業のひとつと我が家では給料制を取り、炊事、洗濯に育児も互いに協力し合つて、自分分の出来る」ことは各自するよ」と

夫も子供たちも二年前から実行しています。

### 講演会やイベントには 夫婦で参加



スイスのルツェルン市内にて

農業という仕事は夫婦とも同じ仕事をしているので夫も家事を手伝うのは「当たり前」それが「自然」だと私たち夫婦は思っています。地域の因習やうわさ話にとらわれず、自分たちの家庭生活に合った生活スタイルを作っています。翼に参加したことで家族のつながりと親と子、夫と妻が互いに人間として尊重し合い話し合うことで、男と女のかかわり合いが少しずつ

## 老人・福祉問題にとり組む

私の所属する女性だけのグループ（自主学習）で老人問題と福祉に 관심があり、岩手県で老人福祉に取り組み実績のある所へ視察研修に出かけ、そこで私たちは肌で感じる物がありました。それは「個人個人が持つている生活課題、福祉課題を地域全体の課題」に高め、今、何が出来るか。将来の方向は何か、等を考え、お互いの立場を尊重し理解し話し合いが必要」と事務局長の話。それは率直に話し合う世代交流会のことでした。自分たちの地域でも老人問題や福祉

変わつきました。自分の生き方は、誰が作るのもなく自分自身であり、暮らし方は家族のつながりが大切だと気づき、共に講演会やイベントにも夫婦で参加することが多くなりました。そして一番変わったのは、私たち若妻自身です。各種のイベントや会合に、講演会などに夫婦そろって参加したりと外に目を向け視野が広がった。原稿の依頼もその一つです。

### 愛のボランティア活動

私たち二回目の「若妻の翼」団

員は、帰国後グループ名を「愛、リーベ、90」と名づけ活動をしています。その一つは社会福祉へのボランティア活動があります。この活動は、老人の昼食の手伝いや話し相手になつたりの仕事です。会員は「私たちが出来る事」からと、この活動から始めました。今では、身体障害者の介護も手伝つ



自主学習グループ友和会、リース作りしている。



村の特産品として売り出し

また主婦たちが中心となり、ドライフラワー作りも盛んです。これもヨーロッパ研修で民泊したどの家庭でも手づくりのドライフラワーが飾つてあるのに刺激されたからです。ヨーロッパの主婦たち

は、自宅の庭の花や周囲の野草を利用し、ドライフラワーをアレンジし、壁掛けを作り玄関や廊下にと掛けておりその技術は素晴らしいものでした。

私たちの住んでいるまわりにも、ドライフラワーが出来る環境があることに気付いたのです。自分の手で作ったドライフラワーを玄関などに飾つたら、今までと違った雰囲気で生活が出来たりにお客さんを暖かく迎えられる環境づくりにもなります。さらに親しい友だちにプレゼントしてみたいとの思が、自分たちでドライフラワーの花づくりまで進みました。それらの花でつくれられたドライフラワーは、イベントに出品したり、村の特産品として売り出しています。ちょっととした「ヨーロッパ研修」

てみたいと新しい意欲がわいてきています。また衣類のリサイクル活動もしていますが、それらの活動に対する会員の力の入れようは

大へんなものです。これも社会に目を向け視野が広がつたからなでしよう。

## ドライフラワー作りも 海外研修の成果



というきっかけで、農村の嫁さんは「時間がない、金がない、自由がない」と言う習慣から一歩ぬけ出そうとしています。それからには自分で感じたことは相手に伝えていかなければならぬのだと思うようになりました。

# BOOK REVIEW

## 「食料を持たない日本経済」

農林中金総合研究所編

今日の日本経済は、輸出産業を中心とした重化學工業発展がめざましく、これと表裏一体であるのが、不安定で安全性に問題の多い輸入食品に依存した飽食と国内農業の衰退である。

日本農業の起死回生のためには、農業の重要な役割が国民経済的にも政策的にも正當に位置づけされる必要があり、そのためには国民のコンセンサスが大切である。ところが、都市生活者等に対しても、農業・農村に関する情報が正確に伝わっていない状況にある。

本書は、農業とは直接かかわりのうすい人達に向けた啓蒙書であり、次の四つの章で構成されてい

る。

第一章 食卓から農業・農村が見えてくる

第二章 農業・農村の変貌と当面する課題

第三章 見えてきた農業・農村活

第四章 都市と農村の「共生」

日本人の食生活は、第二次大戦後の経済成長と国際化によってめざましい変化をとげ、今や飽食の時代を迎えている。第一章では、食卓にみられる食料問題の様相と

特徴が述べられ、とくに輸入農産物の増大による異常に低下した日本の食料自給率、不安定な国際食料需給事情。輸入農産物の安全性

問題等が取りあげられ、長期的視点からの食料政策や農業・農村再生の重要性が指摘されている。

第二章では、戦後農業の出発点となつた農地改革とその後の農業・農政の動向が整理され、次いで稻作をはじめ酪農・畜産・野菜・果樹の各作物部門と山村をめぐる変化の内容と課題について述べられている。

ここでは、農業・農村がかかえる問題点が指摘され、全体として危機的状況にある点が示されている。そつと危機的状況のなかにあって、新しい農業への模索や胎動が始まっている点が注目される。第三章では、農業・農村活性化の先進事例や自発的・内発的な村おこし、非農業者や都市における意欲的な農業振興の取り組みが紹介されている。

最後の第四章では、調和のとれた豊かな社会を実現するための農業・農村の活性化のあり方が論ぜられている。ここで強調されていることは、高度化・成熟化・国際化した今日の飽食の時代にふさわしい新たな農業構築の枠組みとし

ての農業の多面的な社会的役割およびそれらの役割を達成するうえの多様な担い手の確保、都市と農村との交流や相互理解を前提とする両者の「共生」などである。

本書は、日本の農業・農村がかえる問題点とその原因、理解すべき課題、新しい発展の萌芽などをまとめた都市生活者向けの一般農業書であるが、農業関係者の学習にも役立つであろう。

危機的状況にある日本の農業・農村の問題点の解説と農業・農村の活性化の方策を探る議論の展開は高く評価されよう。

ただ、「食料を持たない日本経済」に追いこんでいる産業・経済政策や食料・農業政策の欠陥なり、農協をはじめとする農業・農村組織の弱点についての評価が行われていない点が惜しまれる。

(東洋経済新報社発行 一九九三年四月刊 定価一、七〇〇円)

評者

酪農学園大学

農業経済学科

教授 三田保正

# 冷たい夏に問われる「新農政」

北海道大学教育学部 助教授

鈴木敏正

## 冷夏と地震と台風と

北海道では地震と津波、九州では台風などによる豪雨、日本列島

全体をおおった低温と長雨、異常な夏であった。それは「世纪末」のあやしげな予言を実証するかのようである。すくなくとも、政治改革を最大のスローガンにする新政権が、実際のところ直面している諸課題をうきぼりにさせるのに十分である。

もちろん、冷夏も地震も豪雨も一時的な自然災害であり、日本の一部の地域や一部の産業にとっての不幸と考えるかぎりは、政策全

体の基本的課題であるとはいえない。

しかし、日本の冷夏と長雨はアメリカの集中豪雨、アフリカや東南アジアで頻発する干ばつとともに相互に関連しており、地球全体の環境問題の一環でもある。また、北

海道南西沖地震や鹿児島・東京の豪雨災害が明らかにしたこととは、予知体制・地震対策の偏り、生活の基本にかかる社会資本整備、行政財政制度のたちおくれである。

これらはすべて、日本の国際的・国内的政治的根本的転換を要請している。農政においても同様であろう。

焦点のひとつは、「緊急輸入」があるか否かである。食糧庁は現在（八月末）のところ、来年産米もあてにして、輸入はないとしている。しかし、米の消費量一千万トンに対して在庫は約三十万トンで、適正在庫百万トンを大きくなっている。生産量も約一千万トンだから、作況指数が平年を三、だけ下がれば（九七であれば）单年度で在庫量にみあう三十万トンの不足となる。作況指数がすでに九五

は、十五日以後も続いた冷夏を反映していないし、不作年には九月、十月と落ち込んでいくのが通常であるから、近年にない凶作となることが心配されているのである。とくに北海道・東北が深刻で、北海道八八、青森八五、宮城九〇などと「暑い不良」である。これら「米どころ」では、イモチ病や不稔穀の大量発生も懸念されている。すでに米不足が見込まれ、八月に入つてから自由米価格が五一〇パーセント上昇している。東北や北海道の農家はいまから、みぞれや霜の中での収穫と冬の出稼ぎを覚悟しているという。

焦点のひとつは、「緊急輸入」があるか否かである。食糧庁は現在（八月末）のところ、来年産米もあてにして、輸入はないとしている。しかし、米の消費量一千万トンに対する在庫は約三十万トンで、適正在庫百万トンを大きくなっている。生産量も約一千万トンだから、作況指数が平年を三、だけ下がれば（九七であれば）单年度で在庫量にみあう三十万トンの不足となる。作況指数がすでに九五

## 四十年ぶりの不作

八月二十七日、一九九三年産米の作柄概況（八月十五日現在）が発表された。作況指数九五の「や

で、最終的にはそれ以下になる」とが予想されている現在、来年産米をあてにしても、輸入があるかどうかは予断を許さない。

冷夏の影響は米だけではない。期待された八月上旬も、北海道の平均気温は平年を四・五度も下回り、日照不足も著しい。八月十五日時点で道がまとめた農産物生育状況では、馬鈴薯が「不良」から「やや不良」、甜菜も「不良」。

豆類は中心地域十勝で「はなはだしい不良」である。

天候の変化により敏感な果樹では、出荷時期の遅れと収量の減少だけでなく品質の低下が、栽培農家に大きな打撃を与える。酪農にはすでに、冷夏による牛乳消費量減少と乳価の低下がみられるが、牧草の収量不足と品質低下がこれからボアブローのように効いてくるだろう。

## 問題は長期的かつ構造的

冷夏の影響として話題の中心となっているのは、野菜である。総務省が発表した八月の消費者物価統計によれば、東京都区部の生鮮野菜価格は、前月比で一三・五パーセント、前年同月比で実に四〇・三パーセントも上昇している。これがマスコミで取り上げられないわけがない。消費者の不満もそこに集中している。

しかし、米の需給動向に神経をとがらす政府も、野菜価格の高騰にならむ消費者も、すこし考える。

だけで、今回の事態はけつして天災による一時的なものではなく、構造的な問題を含み、将来にわたって大きな影響をあたえるものであることを理解するはすである。

たとえば、米需給の逼迫は長期的傾向になってきてている。今年はすでに来年の収穫をあてにしている。もし、緊急輸入ということでもなれば、ガットや対米関係が問題になっているおり、政府の「完全自給」政策は崩壊するかも知れない。

減反が緩和されても米の作付面積が増大しないのは、何年も減反政策が続いたために、その間に農家がいっそう高齢化し、何よりも營農意欲を失つてきているからだ。そもそも、すでに畠地化したり荒廃している水田の復元は、それにあう収入を得られない以上、不

可能となってきた。北海道では、すでに水路を壊してしまった旧水田地帯も多い。それだけでなく、借金が高んできている農家は、水田に対する以上の投資を要請することはできない。今回の凶作は、こうした動向に拍車をかけことになっているのである。

## 「新農政」の次への期待

この夏、新篠津村の農家にお話を聞く機会があった。北海道で最も大規模な水田地帯で、「新農政」がめざす「一ヘクタール経営農家」がめずらしい地域である。しかし、農家によれば、稻作一ヘクタールは家族経営の限界である。

そして、それらの農家の多くは、これまでの規模拡大の過程における土地購入、土地改良・機械・設備の購入、さらには災害時の生活費などのため、数千万円の借入金をかかえている。

札幌に「じく近い」この村でも過疎化対策が行政の中心テーマであり、そのキヤッチフレーズは農業振興ではなく、福祉施設の導入を柱とした「ふれあいの里づくり」である。「新農政」を「旧農政」にするような根本的政策転換が必要となる

# 青年団活動が育てる 地域づくりの担い手

北海道大学大学院

大坂祐二

## 消防団・暴力団・青年団

「青年団って何するんですか」

「消防団って知ってる?」

「ええ、まあ」

「じゃあ暴力団は?」

「知つてます」

「青年団もそんなようなものだよ」

ある時、社会教育を学んでいる

大学生と某県青年団長との間でこんなやりとりがあったのを聞いたことがある。消防団はともかく暴力団と比べるなんて、と思われる方もいるだろう。比較がふさわしいかどうかはともかく、多くの若者にとって青年団は、消防団や暴力団と同様、必ずしも身近なものではない。

例えば、雑誌『ザ・青年』が行った、全国九県二十二青年団の新入団員四十三人を対象にしたアンケートの結果を見てみよう。入団前の青年団の印象について、「祭り好き」(三三%)、「一生懸命」(一八%)といつた回答に混じつて、「ダサイ」「古い」(各一六%)、「どつつきにぐい」「入りにくい」(各一一%)という声があげられている。青年団は若者たちにとって、ダサくてどつつきに

くいものなのだ。  
しかし青年団はまた、消防団のように「地域になくてはならない存在であり、暴力団のよう」(?)密な人間関係によって成り立っている(その意味では暴力団と言うよりヤクザと言ったほうがいいかも知れないが、いずれにしろ暴力団やヤクザを肯定している説ではないことはもちろんである)。

北海道青年団体協議会と北海道

青年団研究所が行った道内二十市町村、四百三十人の青年団員を対象にしたアンケート調査の結果、

「青年団活動を通して得たこと」で多かったのは、「友人や仲間が得られる」(七四%)、「他の人と共同で活動する喜びを味わえる」(三一%)、「世間や社会のいろいろなことがわかり自分がひらかれる」(一三%)などだった(複数回答)。

また「青年団に期待する活動」でも、半数以上が「同世代との仲間づくり活動」をあげたほか、三割が「地域発展のための提言や活動」を望んでいる。始めは青年団をダサくてどつつきにぐいと思っていた若者も、青年団のさ



▲訓子府町青年団体連絡協議会の仲間とともに



仲よく腕相撲

訓子府町は北海道網走支庁管内の内陸部にあり、人口およそ七千二百人、世帯数二千足らずの農業の町である。訓子府川・常呂川流域の平野とゆるやかな高台に、およそ五百七十戸の農家が小麦、馬鈴薯、玉ねぎ、メロンなどの畑作や酪農を営んでいる。就業者のおよそ四五%が農業に従事しているが、働いている青年層（十五歳十九歳）の大半は町内や隣の北見市のサービス業などに勤めており、農業青年は三割ほどである。

訓子府町青年団体連絡協議会（以下、訓青協と略）は、一九九〇年度で会員数八十一人（うち女性二十四名）と、近隣の町村の中で大きな青年団だ。日本青年団協議会の機関紙で何度か紹介されたことがある。会員の職業を見ると農業（実習生を含む）が四十七人、

公務員や保母・教員が十六人、農協職員が九人などとなつており、農業青年が半数を占めている。（なおここでの訓子府町に関する記述は、主に一九九一年までの調査・取材によるものである）ことをお断りしておく。

先の道内青年団員アンケートの回答者も農業青年がほぼ半数を占めている。道内でも地域によつて差はあるものの、会社員や公務員など勤めの青年が大半である府県の青年団と比べると、農業青年、それも専業の青年が多いことは北海道の青年団の特徴と言える。

こうした地域では、青年団に集まる仲間が幼なじみであつたりする事はよくあることだ。この点では都市部で青年の仲間づくりを進めよつとする場合との条件は異なつてゐるはずだ。「生いたち学習」

さまざまな活動を経験するなかで、次第に仲間づくりや地域づくりに

目を向けるようになつている」とがわかる。

## 訓子府町青年団と農村青年の仲間づくり

「たまり場学習」などと呼ばれ、青年団や青年サークルの間で広く知られている学習方法がある。これはかつて金の卵と呼ばれ、九州・東海・東北・北海道をはじめ各地から集団就職で愛知・名古屋にやってきた青年たちの、サークル活動の中から生まれた。いいよう

のない劣等感や孤独感を抱え「自閉」する青年たちが、自らの生い立ちや生活をつづり、語り合う。心の傷を個人の問題としてだけではなく、自分たちが育った社会や教育、政治の問題とも関連させ、学びあうというものだ。したがって、隣家の財布の中味までわかっているような農村では、「こうした学習はなじまない」という見方もある。

しかし実際のところ、特にこの数年はどうも様子が違ってきたようだ。例えば、高校卒業後、大学の専修科で一年間学び、さらにアメリカで一年間の農業研修を経験して町に戻り、

Hくんは、入団当時をこんなふうに語る。

「一年目は結構くすぶつていた。友たちもバラバラになつてあんまり知つている人もいない。さあどうしようと思つて、青年団も必要なときしか行かないでだいたい家にいたから、テレビを見たりぼーっとして。」こうじう毎日が続く



訓青協のイベント、ハマリンピック

のかなと思って、結構悩んでいたときもあったけど、それでも青年団に入っていたから、ちょっととしたきっかけで話し相手が出来たから、それでだいぶ救われた。」また、札幌の女子短大を卒業後、農家である「我が家に就職してしまった」というOさんは、入団一年目の文集に次のように書いている。

「それまで鉛筆しか持っていないかった手に10kgの肥料袋、お白粉の代わりに顔には黒い土埃、農作業という講義を終え帰宅する頃には心身共にくタクタク農業研修を経験して町に戻り、「地元に戻ってきたものの、烟と家の往復で友達も少なく、これといった楽しみもなく、平凡な日々……。何が違う、刺激がないじゃない、こんな

のイヤダッ!!」と思ひが頭をもたげても不思議ではない。農村に働き暮らす青年たちにとって「仲間づくり」は、こんな思い見え隠れさせながら進められている。

## イベントの効用

今ほど過疎化・高齢化が進んでおりず、青年層が文字どおり地域

の生産や文化の担い手であった頃に青年団活動を経験した「もと青

そおーだつ! 青年団。入つてみよオーッと)

農業青年が多いと云ふことは、近隣に働き口が少なく、農家を継ぐか町を離れるしかないといふとの裏返しもある。訓子府は町内に食品加工や農業関連の工場などもあり、北見市にも片道「三十分もあれば通えるのでまだいい



商工会、青年部や各種サークルにも呼びかけ「祭典」「運動会」が催された。

年から見れば、今の青年たちは遊んでばかりいるよう見えるのだろう。そんな大人たちの批判に対して訓青協は、「もつと町民に青年の活動を知ってもらおう」と、一九七九年度から「冬の祭典」に取り組んだ。商工会青年部や各種サークルにも呼びかけ、協賛を得て開催された「祭典」では、青年たちの手作りの雪像が披露され、甘酒がふるまわれ、子ども運動会などが催された。評判を呼び町民の間に定着しつつあった冬の祭典は、「観光資源」として町に取り上げられ、八二年二月の第三

回から町の行事として開かれることが決まった。ちょうど町がいわゆる「新過疎法」の指定地域になつた頃のことだった。自分たちのやつてきたことが認められ、町ぐるみの行事にまでなった。その意味では喜ぶべき「昇格」だった。行事が大きくなつて金銭的な負担も大きかつたし、万一千事故が起きた時の責任をどうするかという問題もあった。だが、

今度は主催者ではなく、実行委員会の一メンバーだ。自分たちの発想で自由にやつていたものが、金を出してもらうとなるとそうもいかなくなる。だんだん「自分たちの祭り」ではなくつていいくような気がする……。

町ぐるみの祭りにどう取り組むか議論していた訓青協に附つてきていたのは、祭りの実行委員会の中心になつている町産業観光振興協議会への加入要請だった。総会などで議論した末、青年たちはこんな結論を出した。それは、振興協議会は「青年団の活動とは基本的に異なる点が多く」、自分たちは「損得ではなく、町民の方々

との理解・交流を深める意味で」各行事に参加する、というものが決まり、祭りの取り組みの過程で青年たちは、町や振興協議会、そこに参加している人々がどんな立場で祭りに取り組もうとしているか、見極めようとしていたのだろう。その結果が、組織の利益のためになく、同じ町に住むものどうしの「理解・交流を深めたい」という答えなのだ。

イベントの成果は経済だけで計られるものではないと思う。地域には様々な立場や考え方の人たちがいる。その様々な人たちが立場の違いを超えてこの町で暮らしていくたいという思いで一つのことにつり組むとき、イベントは成功する。青年たちはそんなことを学んでいたのかも知れない。八七年に発行された道内の青年団が取り組むイベントを紹介した資料に、訓青協は「こんな言葉を添えている。

「雪の少ない地域にとって雪像とは、決して仕上がりの結果ではなく、みんなで協力して作製する過程において意義がある。」(祭りは)決して『観光』ではない!」

## 地域の人々と学びあいながら 支えあいながら

青年たちがイベントの取り組みから学んだものは、青年団活動が地域の人々と関わって行くときの、ひとつの目標であり理想であったと言えるだろう。しかし、毎年会員を入れ代わり、全体としては減少しているなかで、目標をくりかえし確かめ合うことがなければ理想を持ち続ける」とはむずかしい。行事をこなすだけで精いっぱい、取り組みの過程や内容には気が回らない、ということもしばしば起る。なにより「町民どうしの交流のため」と言つても、「まず自分が楽しくなくては」というのが青年たちのホンネのところだ。そこで訓青協は、一九八七年度から行事の運営を役員中心から実行委員会中心に切り替え、会員一人ひとりの意見や要求を取り入れた活動を目指した。

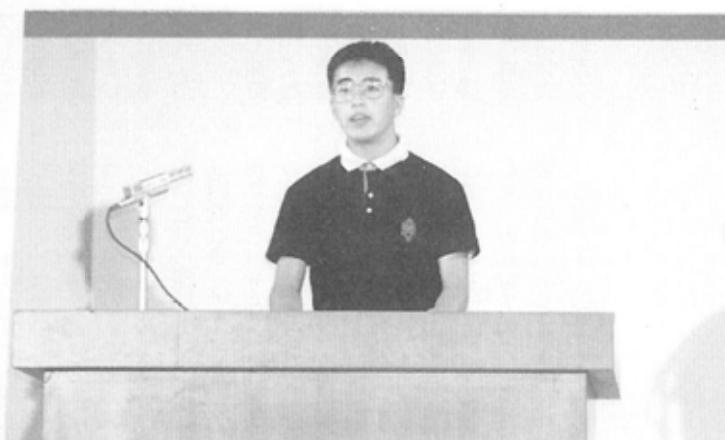
その頃、訓青協会長あてに一通の手紙が届いた。送り主は「たん

ぽぽ親の会」、訓子府の障害児を持つ親の会で、障害者の問題を健常者と共に楽しみながら考える場として「たんぽぽコンサート」を開きたい、ついては訓青協の皆さんにも協力してほしい、という主旨だ。しかし、青年たちはすぐに動かなかった。「障害とか福祉とか言われてもわからない」と、学習・研修実行委員会が中心になり学習会を企画。親の会代表と町の保健婦を迎えて「身体障害者問題を通して自分の健康を考える」と題した学習会が開かれた。

このような学習会はこれまで経験がなく、参加者からは「こいつう事も青年団ができるんだ」という声も聞かれた。また、やがて結婚し親になる青年たちにとって障害児の問題、いのちや健康の問題は身近なことと受け止められ、三ヶ月後には「望まない妊娠をしないために」と題して二回目の学習

会も開かれた。「たんぽぽコンサート」は青年たちもチケット売りなどで協力し、大成功に終わった。この年の活動が影響しているのだろうか、これ以降の訓青協の活動には「子どもたちのため」、「お年寄りのために」といったものが目立つて、例えは函館在住の障害者呼んで寄席を開いたときには、会員の親やおじいちゃん、おばあちゃんをたくさん呼んできた。蘇回しの一座の公演に取り組んだときに、親子券を出して小さな子どもを持つお父さんお母さんに声をかけた。最近では青年たちが弁論や

## 兼第40回 全国青年大会



北海道青年祭に出席、道内の青年団と交流

演劇などを発表し競い合う青年祭で、子どもたちをはじめ町民も参加しての紙飛行機大会が催されている。ひどくちに「町民との理解・交流を深める」と言つても、町には様々な年齢・職業の人々がそれぞれの暮らしを抱えて住んでいる。イベントがそうした違いを超えて

共通の土台に立つ」と成り立つものとするなり、障害者や子ども、お年寄りといった人たちと関わるうとする訓青協の活動は、様々な人々のそれぞれの立場や生活を理解しようとすると見ることができるだろう。もちろん、当の青年たちはそんなことは意識していない

ないかもしれない。それに本当に相互の理解を深めようとするなり、生活の実態やそこでの問題、背景となっている地域の課題など、学ぶべきことはまだまだたくさんあるはずだ。しかし、その手がかりは彼らの活動の中に、いくつもひそんでいるように思う。

## 青年団の“まちづくり”とは…

先に紹介したHくんは、公民館まつりで青年団の出し物として餅つきをやり、子ども連れの家族などに楽しんでもらったとき、「楽しんだり笑ったりしている隣に僕らがいるって思えた」という。また、訓子府の町で暮らしてゆく見通しについて、こんなふうに語っている。

「訓子府で暮らしていくんだつたら、人とのつながりがなかつたら、こんなところで暮らしていけないなって。人の中に入つていかなかつたら自分も変わらないし、成長できないと思う。」女性会員のお姉さんの存在で、

現在は4Hクラブで安全な農産物・食品づくりに取り組んでいるといつらさんは訓青協での経験について、こう振り返る。

「訓青協では保健婦さんとの出会いがあった。それに続いてたんぽぽの会」。こういふことは絶対大事だと思う。…いろんな人に出会えてよかったです」と語っている。

「訓子府で暮らしていくんだつたら、人とのつながりがなかつたら、こんなところで暮らしていけないなって。人の中に入つていかなかつたら自分も変わらないし、成長できないと思う。」女性会員のお姉さんの存在で、

さんのように、様々な人たちとつながりを持ちながら、この町で暮らしたいきたいと願う若者を、確實に地域に送り出している。二十歳そこそこの若者が、彼らだけで「町づくり」と大上段に構えてみて、たいしたことはできないかも知れない。しかし、訓青協で育つリーダーは、町の様々な場面で活躍している。「たんぽぽ親の会」でも参加している親の多くは、かつての青年団のリーダーだといつ。青年団のOBたちが、農家の経営や地域の農業をこれからどうしていこう、子どもたちの育つ環境を豊かにしたい、そんな切実な課題をもつたとき、彼らは訓子府のまちづくりを担う大きな力になるに違いない。

さて最後に、訓青協の青年たちがリーダーとして成長してゆくことを支え見守っている人たちのことに触れておかなければならないだろう。」承知のよう青年団は、社会教育関係団体として、教育委員会から物的援助や指導・助言を受けることができる。訓青協は、青少年研修館という町の社会教育施設でありながら、青年たちが鍵を預かり管理している「たまり場」をもっている。多くの青年団が仕事を終えて集まり仲間どうしじっくり語り合う場所がなく苦労しているなかで、こうした例は数少ない。くわしくは触れられないが、青年たちが「たまり場」を獲得するには、多くの困難もあったし社会教育職員との厳しい議論もあつた。青年たちが町の施設の鍵を預かっているのも、そんな議論の積み重ねのうえに信頼関係があるためだろう。

また、「たんぽぽ親の会」と訓青協の出会いの背景には、社会教育職員と保健婦が連携した社会教育活動、保健活動の蓄積があることも見逃せない。訓子府では教育委員会・農協・普及所が連携した農業青年講座も開かれており、地域の大人たち、とりわけ地域の産業や住民の生活に関わる専門的な仕事に携わる人々が連携をとりながら、明日の地域の担い手が育つてゆくことを支えているのである。

# 情報システムはいま

地区連合会における大規模農業情報システム

(社)北海道地域農業研究所

専任研究員 中村正士

全国的に農協合併が進み複数の市町村をカバーする広域の農業情報システムもめずらしくなくなつた。そうしたなかで、ここで紹介する十勝地域農業情報システムは、先駆的役割を果たしたと同時に、ハートシステムと提供情報内容の

面で国内で最も進んだシステムの一つである。既に、このシステムについては多くの報告があるが、農業情報システムの現状を知るために見逃すわけにはいかないシステムであるところから、今回敢えて取り上げることにした。

## 十勝地域農業情報システム 十勝農協連

十勝農協連の概要  
まず、道外の読者のために十勝

の農業と農協連の概要を見てみたい。  
言つまでもなく、十勝は全道の

耕地面積の約二三%を占める大畑作酪農地帯である。ここで生産される馬鈴薯、ビート、小麦など主要畑作物や乳牛、肉牛飼養頭数、生乳生産量なども全道一を誇る。農業粗生産額も平成三年は二千二百十二億円に達し、全道の約一〇%を占めている。農家戸数は約九千五百戸で、そのうち七〇%に当たる約六千七百戸が專業農家である。

こうした十勝農業を生産指導面から支えてきたのが十勝農協連である。農協連は、昭和二十三年に十勝支庁管内の農協を会員として農畜産の生産指導事業を主とする地区連合会として設立された。現

在、会員数二十八農協、職員数は百一名となつてゐる。主要な事業は、畑作酪農全般の技術指導普及と研究開発、生乳分析、土壤・飼料分析、根粒菌の培養・販売、豆類種子の調整・販売、優良雛の卵販売、農用地の開発整備、農業情報システムの構築などとなつており広範な事業を展開している。また、農協連が主催して毎年開催される「十勝農作物増収記録会」は三十年の歴史をもつもので、技術向上に貢献しているだけでなく十勝の農業生産を巡る貴重なデータを提供しつづけている。

## 農業情報システムは

こうして生まれた

イロゾト事業として「酪農経営情報システム」のサービスが開始された。このシステムは、農家を対象とした本格的な農業情報システムとしては、わが国初といつてもいいものである。昭和六十一年から八年計画で、この酪農経営情報システムを更に発展させ、扱う対象を烟作と畜産にまで広げた「十勝地域農業情報システム」を構築することになった。

他方、農協連では組勘や農協業務のデータ処理システムの構築にも取り組んできた。昭和四十九年に(社)北海道農協電算センターの地区センターが農協連施設内に設置され、管内の農協を対象とした経営管理と事業部門のコンピュータによるデータ処理が始まり始めた。この「農業情報システム」は、農協組合員の営農に必要な情報を扱う「組合員システム」と農協販売・購買に関連するデータ処理を行う「農協システム」の大きく二つのシステムからなっている。別

## メモ

### E O S (Electronic Ordering System)

商品の補充発注データを店舗で入力し、配送センターなどのコンピュータにオンラインで伝送することによって、受発注作業の省力化や迅速化を狙ったシステム。

### P O S (Point Of Sales)

販売時点管理。スーパーやコンビニエンスストアのレジと本社のコンピューターを結び販売時点でのデータを使ってそのまま売上管理や在庫管理、商品管理を行うシステム。

### V A N (Value Added Network)

付加価値通信網。通信ネットワークを利用した情報通信サービスの一環で、NTTなどからまとめて回線を借り再販したり、データ集配信、データ処理、品名コード管理など多様なサービスを提供する。

理を一括してセンターで行うもので、事務処理の簡素化を目的としたものであった。その後、十勝管内のこの事業は農協連に移管された。それまでは、農協からのデータを札幌にあるセンターまで送るリモートパッチ処理を行っていたが、移管に伴つて農協での分散処理を目指すことになり、農協のOA化とコンピュータによるデータ処理を各農協で行う農協完結型のシステムへと移行した。

平成元年からは、農協の生活店铺での合理化をはかるため、EOSやPOSシステムの開発に乗りだし、ホクレンとのデータ交換や流通VANを利用した商品のオン

ライン発注システムの開発にも着手した。農協連における情報処理は電算事業部門が担当してきたが、當農指導事業部門における「酪農情報システム」サービスの事業が本格化したのに伴つて、昭和六十年には「農業情報センター」が帯広市内に設置された。

## システムの全体像

この「農業情報システム」は、農協組合員の営農に必要な情報を扱う「組合員システム」と農協販売・購買に関連するデータ処理を行う「農協システム」の大きく二つのシステムからなっている。別

の言い方をすれば、いわゆる勘定系のシステムである「農協システム」と、情報系のシステムである「組合員システム」を統合したものがこの「農業情報システム」ということになる。

### 酪農経営情報システム

前述したように「十勝農業情報システム」の母体は、「酪農経営情報システム」である。このシステムで培われた技術やノウハウが農業情報システムを生む基礎となつた。本来、「酪農経営情報システム」は、「組合員システム」の一部と考えられるが、生まれた経過から独立したシステムとして説明しても良いだろう。

酪農経営において、乳牛の産乳能力を遺伝的に改良淘汰と適切な飼養管理技術は、生産性を高めるうえで欠かすことができない。わが国では、昭和四十九年から乳牛の能力検定を組織的に行う牛検定事業が実施されるようになつた。北海道ではこの事業に参加する酪農家の全頭の泌乳量データが地区乳検組合を通じて乳牛検定

協会に送られ、生乳検査協会の乳質データなどとともに酪農家へ返される仕組となつている。十勝農協連では、昭和五十三年ころから、酪農家へ結果を迅速に返すこととその結果を基にした酪農家への指導助言をする試みを開始した。その試みの中

自の「乳牛飼養技術診断事業」と「粗飼料・土壤分析事業」が開始された。昭和六十年には、前述のように「酪農経営情報システム」としてコンピュータネットワークが整備された。

このシステムの仕組みは図-1のやうなものである。生乳や土壤、飼料などを分析することによって得られるデータと酪農家が自ら記帳しそれを報告するものに分かれれる。それらのデータは、①乳牛検

図-1 十勝地域農業情報システムの基本体系

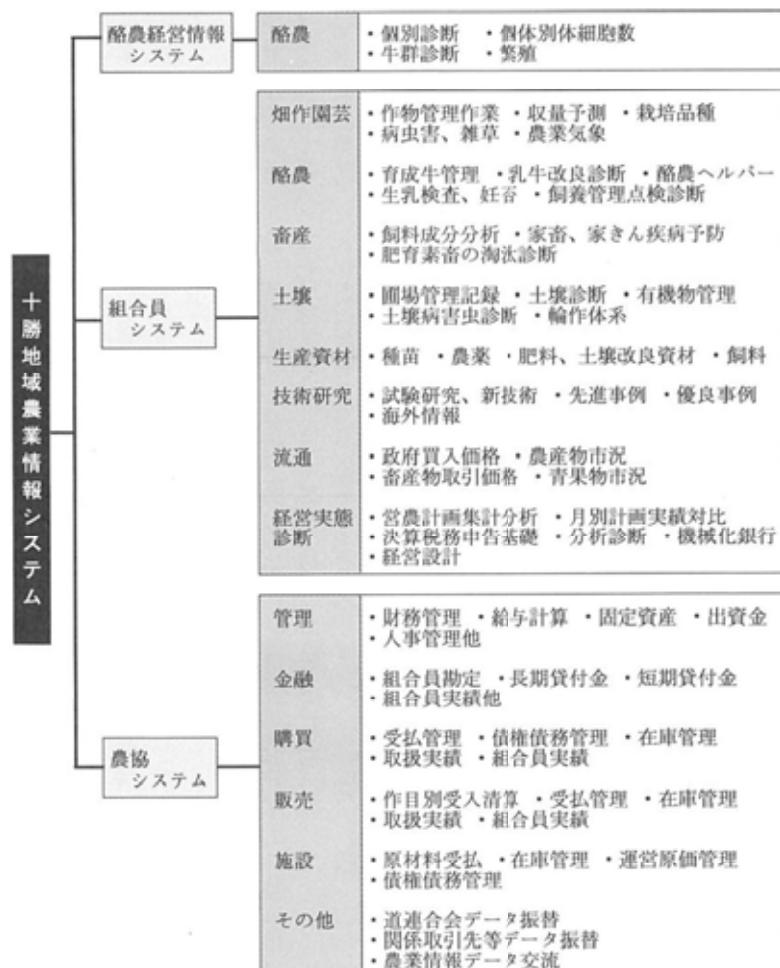


表-1 「酪農経営情報システム」で提供される情報

<b>個体別診断情報</b>	体重、乳量、前月乳量差、乳脂肪分率、無脂肪固形分率、体細胞数、分娩後日数、産次数	定と生乳分析データ（個体別と牛群の乳量、乳脂肪分率、無脂肪固形分率、体細胞数、体重、分娩月日、乾乳月日、産次数など）
検定情報	アメリカのNCR飼養標準を基にした乾物摂取量、TDN摂取量、粗蛋白質摂取量、ADF摂取量、Ca摂取量、P摂取量の充足割合、一日当たりの飼料費、乳代差引飼料費、乾物摂取量に対する粗飼料割合	②繁殖データ
栄養充足状況	今回泌乳期における空胎日数、次回分娩予定期日、押乳実日数、前回泌乳期における空胎日数・押乳日数	タ（初回発情月日、種付月日、最終種付月日、交配種雄牛番号など）
管理情報	検定時1日当たり総乳量、総乳代、総飼料費、総乳代差引総飼料費および1頭当たり平均乳代単価	③飼料給与データ（飼料名、価格、給与量など）
<b>牛群診断情報</b>		の三つに分類
牛群成績		
産次数の分布	検定日時点における押乳牛別、乾物牛別分布および押乳牛率	
乳量レベル別経済評価	1日産乳量別乳脂肪分率、無脂肪固形分率、1頭当たり乳量、乳代、飼料費、乳代差引飼料費、乳代に占める飼料費の割合、生乳1キロ当たり乳代差引飼料費のそれぞれの平均値および前月における十勝地域と自分の牧場の実績値	
検定成績	分娩後日数と乳量レベル別押乳牛の分布および妊娠プラス牛の分布状況 乳量レベル別および産次別の体細胞数の分布と平均体細胞数	
繁殖サイクル	産次別空胎日数の分布と平均空胎日数および種付け中の頭数	
栄養充足状況	乳量レベル別栄養充足状況	
固体検定成績	押乳牛の産次別305日期待乳量の能力レベル別分布状況	
<b>固体別体細胞数測定情報</b>	過去6ヶ月間の体細胞数と乳量の推移および平均体細胞数 今月推定損失乳量と推定損失乳代の表示	
<b>繁殖チェックシート</b>		
授精状況	妊娠が確認されていない固体を①分娩後日数順に、②現時点（授精日）での推定分娩間隔別（3区分）に分類し、それぞれの分娩後日数、分娩月日、産次、初回発情月日、最新授精月日、授精回数などの表示	
発情チェックカレンダー	授精中の固体ごとに発情予定期日順に表示	
分娩予定期リスト	妊娠確認牛を分娩予定期日順に並べ、それぞれの空胎日数、乾乳予定期日、授精種雄牛を表示	
経営情報シ	この酪農	できる。飼料分析と土壌分析データを得るためにには、酪農家が牧草地や畑の土壤および牧草やサイレージのサンプルを採取し、農協連

ターに送る必要がある。これら全てのデータが農業情報センターのホストコンピュータに入力されると翌日には農家や農協（または乳牛検定組合）のコンピュータ端末で表-1に示すような各種の診断結果を見る。これが何であるかは、この酪農の問題から今のところ端末機から情報提供は行っていない。

酪農経営情報システムが酪農を対象とした情報サービスであるのに對し、組合員システムは、畑作、園芸、畜産農家を含めた全ての経営形態を対象としたものである。農家の経営上必要と考えられる、気象や病害虫、土壤、施肥と言った技術情報と組勘の取引明細情報を提供するのが目的である。提供されている情報は広範囲にわたり、現在計画中のシステムも含め最終的には三十八項目にもなる。主要なものとしては、農業気象や土壤診断、施肥設計、農産物・青果市況、畜産物相場、中古農機情報、組勘残高・貸付金残高情報、農業簿記などがある。土壤診断や施肥設計、農業簿記などは運用上の問題から今のところ端末機から情報提供は行っていない。

### 組合員システム

システムは乳牛検定事業に参加している酪農家が対象であり、平成四年度では管内全生乳出荷酪農家の六六・六%に当たる一千八百九戸が利用している。



「」の組合員システムのサービスを受けるために「農業情報端末」と呼ばれる、ファクシミリ機能とコンピュータ機能を合わせ持った端末機が農家に配布されている（写真）。この端末機は、独自にファクシミリネットワークをもつている（農協を除く十勝地区全農家の約九〇%に当たる七千三百一戸）に設置されている。組合員システムが常に問題になる。このシステムの場合は、市況や全道の中古農機情報など一部の情報については、ホクレン農業情報システムなどを利用している。

このシステムについては、提供される情報内容の充実や新たなシステムの開発が現在も進んでおり、必ずしも完成されているわけではない。そうしたことであって、外部のデータベースの利用も含め、今後、システムの改良が大きな課題となるだろう。

土壤診断や施肥設計については、端末機から計算結果だけを情報として流すことはシステムとしては容易である。しかし、農家の端末操作の習熟を含め、実施に移すにはまだ時間がかかるようだ。

テムや酪農経営情報システムで提供される情報は、この端末を使つて受信する。気象や市況、中古農機情報などについては、端末機の画面で即座に見ることができが、多少機械の操作に慣れる必要があるようだ。

こうした情報提供システムでは、システムに乗せる情報をどう集めるかが常に問題になる。このシステムの場合、市況や全道の中古農機情報など一部の情報については、ホクレン農業情報システムなどを利用している。

### 農協システム

農協システムは、前にも述べたように農協における組勘データの処理から始まつたシステムである。現在、管内二十五農協のうち二十二農協が利用しており、残り三農協は独自コンピュータによるデータ処理を行つていている。

このシステムの目的は、農畜産物の販売、生産に必要な資材や機械、生活用品の購買などにかかわるデータ処理業務を農協元結方式で行うことである。現在、組勘や金融、購買、販売など農協の業務処理が各農協のホストコンピュータで行われている。

ではセンターはどのような役割を持つっているのだろうか。

センター側では、これら業務のデータ処理のほか一部の集計業務を行つており、農協で稼働している関連ソフトの保守や開発が中心となつていて、また、各連合会と農協とのデータ交換の中継センターとしての役割も果たしている。例えば、生乳や一般農産物・青果物、畜産物の

販売に関わる精算については、ホクレンとのデータ交換を行つていて。

現在、農協システムに包含され稼働している個別のシステムは図-1のようなもので、五つに区分されている。

### 通信ネットワークシステム

センターのコンピュータは、農協連の生乳・飼料土壌分析センターと接続されているほか、北信連、共済連、ホクレンなどの連合会と接続されている。また、農協系統外の気象協会や乳牛検定協会、ホルスタイン登録協会などとも接続されている。これらの団体・機関からの情報と分析センターからの情報は、農業情報センターでデータ処理され、JAネット北海道の通信回線を介して各農協に送られる。個々の農家は、各農協のコンピュータを端末を使って呼び出すことになる。

### システム運用体制

センターは、前述のようにホス

トコンピュータの管理・運用やソフトウェアの開発、システムの保守管理、農協システムの一部のデータ処理を業務としている。当初計画していた標準的なシステムにかかるソフトの開発については、メーカーが開発に当たったが、更新や保守はセンターの要員が行っている。また、農協から個別に要望されるソフトの開発については、農協側で開発するかセンターに依頼し、開発したソフトは「ソフト銀行」に登録し他農協の利用を図ることである。現在、こうした業務を行つために、センターでは外部からの派遣も含め十一人の体制を組んでいる。

### 事業費と運営経費

システムが大きいだけにその事業費も膨大なものである。昭和五十六年に生乳分析施設を設置して以来、平成四年に管内全農家に端末を配布するまでの十一年間に農業情報システムに投資された、全事業費は人件費を除き約三十一億九千万円にのぼる。そのうち三十億が施設やコンピュータにかかる

た経費で、ソフトは一億九千万であった。

一方、センターの運営管理にかかる経費は年間約二億円。農協と一緒に利用しているシステムが異なることから、負担額も異なり多い農協で一千七百万円で少ない農協では四百万円ほどとのことである。平均すれば一農協当たり約八百万円の負担になる。

## 現状での課題と将来展望

この農業情報システムは、農協の業務システムから農家の営農技術情報を至るまで、非常に広範囲なものである。そのため現状での課題は、施肥設計システム、農業簿記システムと言つた個々のシステム固有の課題からネットワークの使い方に至るまでさまざまな分野に及んでいる。

最も基本的な課題は、何と言つても情報ソースの拡大だろう。農家がこのシステムを頼りにするようになるためには、必要な情報がどれだけあるかが問われるが、た

「酪農経営情報システム」については、別途利用料金を徴収している。二十六農協全部がサービスを受けており、各農協一律四万円の負担となっている。

情報提供を受ける農家の負担としては、電話の回線料と保守料、用紙代、電気代として月額二千円程度であり、情報の利用そのものに対する負担はない。

エックがどうしても必要なシステムについては、農協や農協連の営農指導体制が整備されている」とが前提となる。そうしたことから、システムの開発は営農指導体制の強化とも関連していくと思われる。十勝地域農業情報システムは、全農家にコンピュータを配布するという、時代を先取りした大胆な事業である。今後、農家が徐々に世代交代が進むにつれ、農家のコンピュータ端末の利用は「日々日常的なものになり、農家経営の中でこのシステムが果たす役割は益々大きくなつて行く」とだらう。

### 参考資料文献

十勝農業協同組合連合会資料「十勝地域農業情報システムの概要」平成五年四月

永木 正和「地域情報化システム構築の事例研究 農業情報システム（帯広）」「地域開発と情報化事典」フジ・テクノシステム昭和六二年

## 北極圏の農業？ —白夜の国フィンランド—

## essay

現代ピューロー取締役会長  
北海道フィンランド協会専務理事

井 日 光 雄

成田から  
の直行使で  
十時間ちよ  
つと、機首  
を下げはじ  
めたジェット  
ト機の窓に  
緑一杯の大  
地が開けて  
いた。北海  
道ならしさ  
すめ帯広か  
女満別の空  
港に着陸す  
るような感  
じが、北欧  
のフィラン  
ドの第一印  
象である。  
ヨーロッ  
パの最北の  
国の一つフ  
ィンランド  
は、緯度を  
聞くと大抵  
の人はびつ  
くりする。  
国の一一番南

トになると殆んどが北極圏に入れる。そんな北国フィンランドも、メキシコ(寒暖流が近くの大西洋岸を北上してくるなどいくつかの要因で、気候は私達の住む北海道とそんなに変わらず、農業も昔からとても盛んだ)。ヘルシンキの七月は、日中の平均気温が十九度を越え、暑い日には三十度にも昇る。五月の中旬から八月の上旬までは白夜の季節で、従つて一日の日照時間が非常に長い。だから、畑では多くの種類の野菜や果物、ベリー類がよく育つ。ちなみに、南部フィンランドでの作物の年間生育期間は、百八十日間にもなるという。

ヘルシンキを訪れる人は、必ずといつてもよい程、港に面したマーケット広場を訪れる。夏期には朝六時頃から午後三時頃まで市が立ち、市民や観光客でにぎわっている。冬でも数こそ少ないものの、ビニールやテントで囲った店が開いている。市で一番目立つのは、

果物や野菜を売る店で、リンゴやナシ、トマトなど種類も豊富で値段も安い。花屋さんも多く、各地のこうした朝市を散策するのは、私の楽しみの一つだ。

さて、ここで「フィンランド」について簡単に紹介したい。位置は先述のようにヨーロッパの最北にあって、東側はロシアと南北に一千キロ以上も国境を接している。西側はボスニア湾をはさんでスウェーデンと向かい合い、北部のラップランドはノルウェー、スウェーデンと接する。国の広さは日本よりもちよつと小さいが、人口は五百万人でこれは北海道よりも少ないつまり、如何にゆつたりとしているかが分かろう。

フィンランドが独立したのは一九一七年、昨年は盛大に七十五周年を祝った。しかし、独立前約一世紀にわたつたロシア統治（それ以前はスウェーデン領だったが）は、独立後も大きく影を落とし、ソビエトは国境線を超えて二度もフィンランドを攻め、また第一次大戦後は領土の一部を接收し、また巨額の賠償金を課してフィンラン

ンド国民を  
苦しめた。

フィンラ  
ンド人の日  
本人への親  
近感は昔か  
ら知らされ  
ているが、  
こうした口  
シア(ソ連)  
との歴史的  
な葛藤を抜  
きにしては  
説明できな  
い。日本に  
も輸入され  
ていたフィ  
ンランド産  
の「トーロ  
ー」名のビ  
ールは、日  
露戦争でロ  
シアのバル  
チック艦隊  
を破ったか  
の東郷元帥  
の名を冠し  
ている。



ヘルシンキの朝市 果物や野菜が豊富だ

私がフィンランドを始めて訪れてからもう二十年以上にもなり、これまでいろんな産業に接する機会があつたが、農業だけは觸わりは薄かった。ただ訪れるたびに北海道産に負けないようなおいしい牛乳を飲み、サイズは小さいが上等なジャガイモを食べ、チーズやバター、パンなど、殆んど自国产の材料を用いた食品を食べていたのだから農業と無縁というわけではなかつたろう。

この一文を書くために東京のフ

ィンランド大使館から取り寄せた資料、「Northern Vitality (北の活力) — フィンランドの農業—」という冊子の冒頭に「“北極圏のそばはの農業ですか?”と皆さんはよく尋ねるが、私たちはすかさず“ええ、家庭農場をベース”」、新鮮で純粋、高品質が自慢の農産品を作っています」と答えます」と記されている。近年輸出も好調なフィンランド産食品の特徴と自信がうかがわれる。

しかしフィンランドの農業も第二次大戦後は苦難の途を歩んで来た。一九五〇年当時、労働人口の

四〇%近くも占めていた農業従事者は、機械化の進展や余剰農産物の輸出の落ち込み、さらに日本もそうだったが、社会的経済的な構造変化の中で減少の一途をたどり、今日では約七%の十六万人弱である。耕地面積は、北極に近いだけに国土の七・一%にすぎないが、北海道の一倍があり、農業従事者の数が本道とあまり変わらないので、経営面積はフィンランドの方が二倍以上広いようだ。

今日のフィンランド農業は、酪農が農業所得の四分の三を占めている。従つて耕地の四〇%は干し草で、その他は麦類やてん菜、ジャガイモなどが主、ラップランドでは少数民族のサーメ人が約二十万頭のトナカイを飼育している。なお、フィンランドで消費する食料品の殆んどは、現在、工業的に生産されており、原料の八五%が国産である。

「フィンランドの夏は短いが、清らかである。北で育つ食物は純粋で、味もすばらしい。何故ならば、国土に人は密集して住んではいる、汚染もきわめて少ないから



## カウスティネンの農家の婦人たち、 左端が著者

だ。」と前述の「北の活力」は書いている。統計によると、カドミウムはベルギーやニュージーランドの四分の一以下、水銀はドイツの二十分の一、鉛はベルギーの二十分の一で、日本の四分の一以下の「最も低い国」一つだ。こうしたことは理由となって、ランド産品の海外での

路易二世

ところで私は、三年前の夏、妻

理しただけに、存分に味わせてもらつた。

活力」は書いている。統計によるところ、カドミウムはベルギーやユージーランドの四分の一以下、水銀はドイツの二十分の一、鉛はベルギーの二十分の一で、日本の四分の一以下など、フィンランドは世界で最も高い水銀濃度を示す。一方、内を旅して歩いた。ボスニア海に近い中西部の小さな町カウステイネンでは世界的に知られる民族音楽祭が開かれていて、フィンランド、全土から、美しい民族衣装で着飾った町の音楽家たちが集まり、十日間にわたってフォーカ・ミュージックやダンス、様々な催しきをくりひろげていた。

私たち二人は、近くにヘルシンキの友人の実家の農場があったので、「厄介になり、民族音楽祭を卒業した。核家族化の進むフィンランドだが、農村部はまだ大家族が多い。友人の実家も、両親とその姉妹など年寄りたちが仲良く一緒に暮らしていた。

た農家に宿泊滞在するファーム・ステイが人気を呼んでいて、日本からも若い人たちの利用が増えている。私たちの北海道フィンランド協会でも、「紹介をしているので、」関心のある方はぜひどうぞ。(電話・札幌二七一〇八六四)森と湖の国フィンランド、音楽の好きな人はシベリウスを、小さなお子さんやお母さんは、サンタさんやムーミンを思い出されるかもしれない。旅をするなら白夜の頃もよいが、しんしんと冷え込む冬の夜は、神秘のオーロラが歓迎してくれる。美しい自然と人の心の暖かさにふれるフィンランドの旅を一度はおすすめしたい。

「活力」は書いている。統計によるところ、カドミウムはベルギーやユージーランドの四分の一以下、水銀はドイツの二十分の一、鉛はペルギーの二十分の一で日本の四分の一以下など、フィンランドは世界で最も値の低い国の一つだ。こうしたことでも理由となって、フィンランドの海外での内を旅して歩いた。ボスニア河に近い中西部の小さな町カウステイネンでは世界的に知られる民族音楽祭が開かれていて、フィンランド全土から、美しい民族衣装で着飾った町の音楽家たちが集まり、十日間にわたってフォーク・ミュージックやダンス、様々な催しきりひろげていた。

私たち二人は、近くにヘルシンキの友人の実家の農家があったので、「厄介になり、民族音楽祭を楽しんだ。核家族化の進むフィンランドだが、農村部はまだ大家族が多い。友人の実家も、両親とその姉妹など年寄りたちが仲良く一緒に暮らしていた。

滞在はとても楽しかった。ぶらぶら食後の散歩をしたり、森林浴したり、夕方にはサウナが待っている。特に皆んなで一つの食卓を囲む夕食は、友人のお母さんたちが、自家製の材料や近くの湖でとれた魚などを腕によりをかけて料理

湯在はとても楽しかった。ぶら食後の散歩をしたり、森林浴に身をゆだねたり、牛小屋をのぞいたり、夕方にはサウナが待つてゐる。特に皆んなで一つの食卓を囲む夕食は、友人のお母さんたちが、自家製の材料や近くの湖でとれた魚などを腕によりをかけて料理

### 提案研究

一、鮮度保持を要する北海道農産物の低コスト物流システムの確立  
—道立中央農試との共同研究—

夏期号で平成五年度の当研究所事業計画についてお知らせしましたが、こゝでは前期（四月から九月まで）の調査研究進捗状況を報告します。

### 受託研究

#### 一、「カジュアルフラワー」の需要拡大の見通しと本道における生産のあり方に関する研究

—委託者 北海道農政部—

北海道農政部は、今年度「新北海道花き生産振興方針」を設定、その一環として平成五年度科学技術振興費による研究を委託された。需要動向調査および生産方向の検討などの研究が必要なことから、これまでにプロジェクトチームによる、流通拠点調査（大阪・名古屋・東京・札幌など）および先進产地調査を実施し、検討会および研究会を開催した。今後、北海道における生産のあり方を検討していく。

#### 二、農産物出荷・輸送高度化システム調査（前年度より継続）

—委託者 北海道開発協会—

本調査は、年々増加している道外移出農産物流通の問題点を解決するため、北海道開発局が計画、昨年度関連調査が当研究所に依頼された。

昨年度は、移出の実態把握および要因分析を実施し、問題点ならびに課題を整理した。本年度は、輸送基盤整備に対応した輸送体系の方向づけについて検討中である。

#### 三、網走地域 高収益農業確立についての調査業務

—委託者 北海道開発協会—

本調査は、網走開発建設部が管内の農業ならびに農産加工事業の高収益を目指して調査企画したものである。昨年度は、管内農業の実態を把握した。現在、加工向け野菜の実態ならびに加工にあたっての問題点を調査している。

近年、道産野菜の移出拡大により、鮮度の保持を不可欠とした農産物流通システムの確立が急務となっている。本研究は、多額の費用負担をする上記流通システムの低コスト化が目的である。昨年度は、保鮮流通の実態把握、主産地農協の調査などを実施した。これまでに消費地調査を実施し、低「スト保鮮流通の総合的検討を試みてている。

#### 二、道産野菜の競合产地情報システムの開発

—道立中央農試との共同研究—

道産野菜と出荷時期が競合する都府県産地の市場動向を、NAPASS（全国農産物市況分析システム）の活用によって把握することを目的とした共同研究である。現在、都府県市場の情報収集、データベースの作成、その利活用システムの検討などを実施しており、これにより道産野菜の販売戦略の構築を目指す。

#### 三、農家経済の再建に関する調査・分析

—北海道農業信用基金協会との共同

研究—

過大な固定化負債を抱える農家の経営改善、経済の立て直し対策の確立的目的とし、北海道農業信用基金協会ならびに道立根訓農試の協力による共同研究である。現在、負債固定化の原因ならびに過去の対策の成果を分析中である。事例対象地域を別海町とし、今後農家調査を実施する予定である。

### 自主研究

#### 一、農地問題研究会

本研究会は、「北海道における農地問題」を検討することを目的に、

本年度開設された。大学、試験機関、団体からなるワーキンググループを設置、当グループのメンバーを中心

に、調査（八月岩見沢市、九月深川市）ならびに研究会が開催された。

#### 二、農業情報に関する研究

全中奨励研究「地域農業技術センターの役割と機能強化に関する研究」

をテーマに昨年から取り組んでいる。これまでに、風漁町、北村、厚真町、鶴川町、興部町の事例調査、ならび

にセンターに対するアンケート調査を実施した。今後は、これら調査結果をもとにセンターの在り方と機能

強化に係わる課題の整理を行う。

#### 共同研究

#### 一、追分町農業振興計画に係わる基礎調査

—委託者 追分町—

追分町では、メロンを中心と比較的高い戸当たり農業所得を維持してきたが、近年これが停滞傾向にある。また、農地が狭隘であるため、再編方向としては、水稻十野菜の複合經營を追求せざるを得ない。これまでに、農家アンケート調査分析と農家調査を終えた。

#### 二、知内町農業発展ビジョン策定に係る基礎調査

—委託者 知内町—

#### 関連事項/ DATA

##### DATA FILE

北海道立北見農業試験場  
〒099-14 常呂郡訓子府町弥生52番地  
☎0152 (47) 2146  
コープさっぽろ生活文化研究所  
〒060 札幌市中央区北7条西18丁目  
4番23号  
☎011 (641) 4417  
酪農学園大学農業経済学科  
〒069 江別市文京台線町582番地1  
☎011 (386) 1112  
北海道大学教育学部  
〒060 札幌市北区北11条西7丁目  
☎011 (716) 2111  
株式会社現代ピューロー<sup>1</sup>  
〒060 札幌市中央区北2条西3丁目  
札幌第1ビル7F  
☎011 (231) 6049

知内町では、減反政策開始まで稻作を中心に発展してきたが、その後転作田利用の野菜作が大きなウエイトを占めるようになってきた。近年、担い手不足、高齢化、集約作物導入による労働時間の増加といった問題が発生している。これまでに農家意向アンケート調査、農家調査を実施中である。

#### 三、生田原町農業振興計画に関する基礎調査

—委託者 生田原町営農指導対策協議会—

生田原町の位置する東紋地域は、林業および鉱業を中心とした歴史を引き継いでおり、農業面における生

産性の低さ、担い手不足といった問題が顕在化している。これまでに関係機関調査を終え、現在農家調査を予定している。

#### 四、美深町農業振興計画に係る地城診断(前年度より継続)

—委託者 美深町農協—

農、畜産、畑作への転換が図られた。また、営農集団の明確な方向性を見いたすため地域診断が計画された。関係機関調査、農家調査、先進地調査の結果を踏まえ、美深農業の展開過程、農業振興方向、現在組織されている営農集団の方向、計画中の農業活性化センターの在り方などについて報告書をまとめた。現地関係機関団体に対する報告を終え事業を完了した。報告書は『地域農業研究叢書No.15』として発行した。

#### 六、静内町農業振興計画に係る基礎調査

—委託者 静内町・静内町農協—

静内町は、軽種馬生産を中心とした農業基盤を築いてきたが、その方向への特化は、競馬界が国際化時代を迎えたことにより、再編が迫られている。右記の点を考慮した静内町の農業振興方策として、軽種馬以外の部門にも力を入れた総合的な農業の発展を提案し、振興計画の樹立を目指す。

#### 七、卸売市場の価格形成と消費動向

—委託者 コープさっぽろ—

青果物の出荷動向が卸売市場の価格形成にどのような影響を与えるのか、そのメカニズム、さらには小売価格との結びつきなどを明らかにすることを目的としている。これまでに市場調査ならびにデータ整理を行い、市場価格の動向を把握した。

反面コストの低減には結びつかず、厳しい状況に陥っている。こうした状況から抜け出し、所得増大、ゆとりある労働、農家減少の阻止、累積負債返済などを目指した。報告書は『地域農業研究叢書No.13』として発行した。

# 特定のメーカーに属さない、 完全独立のコンピュータコンサルタント

## ISC 株情報システムコンサルタント

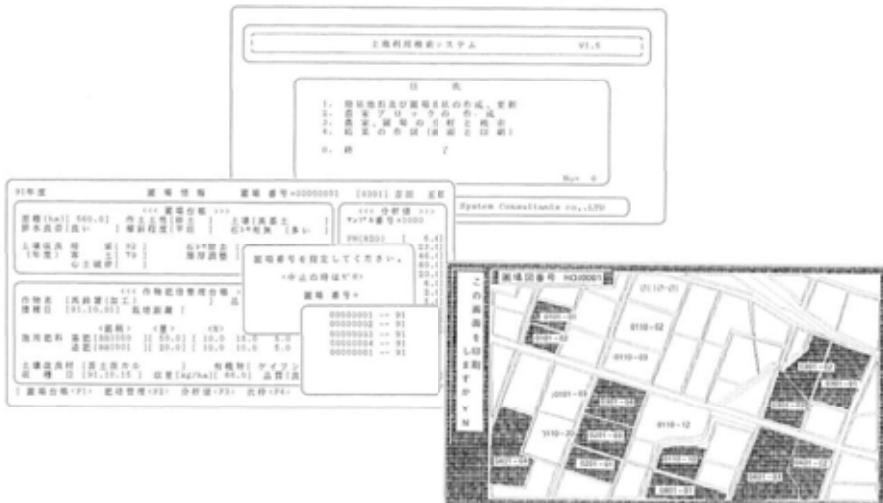
Information system consultant CO.,LTD

### 主要業務

- ◇コンピュータ導入時のコンサルタント業務（メーカーへの仕様書、導入計画策定など）
- ◇ソフトウェアの開発（開発計画、開発、既存ソフトウェアの調査など）
- ◇システムの運用指導

## 地域内の土地利用計画や農家のほ場データの管理に 『農地総合管理システム』

開発協力：（社）北海道地域農業研究所



- ・耕地面積、貸貸、受委託などの農家別データ管理
- ・地区内の耕地図（概念図）管理
- ・一筆ごとの土壤調査・分析・肥培管理などの履歴データ管理
- ・対応機種 PC9801 シリーズ

ISC Information system consultant CO.,LTD

株情報システムコンサルタント

札幌市白石区南郷通19丁目北1-31 豊川ビル3F

☎ (011) 865-8272 FAX (011) 865-6596



活力ある明日の農業・農村を拓くため

明 日

農地の効率利用を促進する  
農地保有合理化促進事業

この事業は、農地を買入・借り入れし、集団化や開発造成を行って、規模を拡大したい方や新規就農者に売り渡し・貸付を行うものです。

(財) 北海道農業開発公社

060 札幌市中央区北5条西6丁目 農地開発センター内

TEL 011(271)2231